

ズ、十二月下旬ノ相庭筑前米四十五匁二分五十目前後、廣島米三十九匁四十分、目前後ニテ愈下落ス、是不融通ヨリ起リテ、金銀ノ位貴クナリ、米ノ位彌賤シ、又諸家方ノ仕送リヲ始メ、諸國貨物ノ取捌キモ一切ニ相止、市町ハ買米ニテ迷惑ニ及ブ、又御用務リ難ク斷リニ及ビ、答ヲ蒙ル者等アリテ萬事必至ト、差支前代未聞ノ騷動ナリ。今年六月十二日大御所家重公薨御。奉稱惇信院。

- 肥後米 代五十四匁五分
- 筑前米 代五十五匁
- 廣島米 代四十五匁
- 中國米 代四十二匁五分
- 備前米 代四十七匁五分

右ノ如ク相替ラズ米價下落シ、市中御用買米ノ功ナク、府内一統陰氣ニテ、諸貨物交易等相止ミ、下民衰微シ難澁大方ナラズ、全ク御用金ニテ金銀ノ不融通ヨリ起ル、然ル處當正月下旬ヨリ御用相止ムト風説コレアリ、俄ニ相庭引立、正月十九日ヨリ廿九日ニ到リ、筑前米六十六匁ヨリ帳合米七十八匁ニ至ル、二月下旬御用相止ミ、其以後六十目前後、夏中九州、西國邊旱損ニテ不熟、コ

レニ依テ十月以後追追ト高直ニ成リ、十二月

- 肥後米 代七十一匁七分 筑前米 代六十目八分
- 廣島米 代五十八匁六分 金 代六十一匁九分
- 錢 代十五匁五分九厘

米穀ノ豊凶ハ天地自然ニテ、人カノ及ブ處ニアラズ、天ニ私ナク地ニ依怙ナシ、是旱雨トイヘドモ、天地氣化ノ變ニテ、又萬物盛衰陰陽ノ消長皆定理有リ、然レドモ相場ハ衆人陽化ノ私ヨリ起リ、自然ト高下有ル事ニテ、陰氣ニテハ引立難シ、人氣服セザルニ無理ニ高下アラセントシテハト、ノハズ、萬物定理有リテ人天地ノ理ニ反スレバ、天地亦人ニ反ス、豐熟打續ク時ハ、士民共ニ悦ブベキ事ナルヲ、米價ノ下落ニ及ブヲ以テ人欲發シ、何トナク豐熟ヲ疎ンズル様ニナリテ、天又其罪ヲ憎ンデ、遠カラズ凶ヲ以テシメス、其時士民又豐ヲ祈ルトイヘドモ、天地之ヲウケズ、凶年續キテ人民ヲ害ス、唯天然ヲ守リテ人欲ヲ押ヘ、常ニ盛衰ノ道理ヲ考ヘ、能ヤコレヲ覺悟スベシ、商賈ノ道ハ能貨殖スルヲ以テ勤トス、然レバ理屈ヲ放レテ道理ニシタガフコトヲ工夫スベシ、此道理ト理屈ト同意ノ様ナレドモ、儉約ト吝嗇トコトナルガ如シ、理屈ノ

理ハ筋目ナレドモ、屈ハカミムニテ思慮ノ外へ轉シ、脇道へ狂ル心アリ、人々才智ノ分量ニシテガヒ我勝手ノ方へ引付ケ、自然ト狂リテ無理ヲ行フ故、人服從セズ、却テ物ゴト窮屈ニテ損アリ、道理ニ從フ時ハ却テモノゴト潤大ニテ益アリ、易ノ損益ニ、凡益之道與時偕行、傳、天地之益无窮者、理而已、聖人利益天下之道、應時順理、與天地合、與時偕行、又孟子ニ、天時不如地利、地利不如人和ト云リ、天ノ時地ノ利、相應ジテ米穀生熟スルモ、人ノチカラヲカラズシテハナリガタシ、天ノ時地ノ利トイヘドモ、人和ノ賣買ナクテハ用ヲナサズ、相庭ノ高下モ天ナリ、時ナリ、是ヲ動サントスルハ人ノ智ニアリ、智ニ道理アリ、理屈有テ、我智ニ倒サル、事有リ、能勘辨スベシ、道理ハ今日ヲ正シク、夫々筋目ヲ考、稼殖シ、高利ヲ貪ラズ、道ニ從ヒ、金銀ヲ儲ケ、富貴ニナルハ、則天ヨリ授ケ玉フ福ニシテ長久也、イハユル徳ヲ以テ人ニ勝者ハ、昌、力ヲ以テ人ニ勝者ハ、亡ト云ニ同シ、理窮バ不時ノ儲ケアリテ、富貴身ニ餘ルモ、又金銀悖リ出デ終ニ衰微ス、道理ト理屈トヲ能考フベシ、道者須臾モ離ルベカラズ、離ルベキハ道ニアラズ。

——三貨圖彙

附記
圍初申合

〔附記〕 圍初申合

寶曆十二年三月

御勘定奉行

御料所辰巳兩年圍初之内、去々辰年圍初之分、當午秋新初を以詰替候様被仰出候間、万石以上之面々、後右ニ准、去々辰年圍初之分、當午秋新初を以詰替可被申候。辰年圍初之分此節、摺立家中扶持米等ニ相渡候儀を勝手次第、拂米ニいたし候儀ハ可爲無用候。

一、万石以上江戸廻米之儀を、去ル巳年之通廻米高之内、貳分通相減候様可被致候。右委細之儀を、御勘定奉行可被承合候。

三月

右之通、万石以上之面々、相達候間、可被得其意候。

寶曆十三年五月

御勘定奉行

先達、置初被仰付候、万石以上之面々、辰巳兩年置初之内、辰年初之分を、去々午年米を以詰替置候ニ付、當年ハ其儘差置、巳年初之分共國々ニおいて、勝手次第、相拂候様可被申付候。委細之儀を、御勘定奉行可被承合候。

幕府時代ノ救濟

五月

右之通相達候間可被得其意候。

寶曆十四申年二月

御勘定奉行

先達を置初被仰付候万石以上之面々去ル辰年置初同午年初を以詰替置候分其國々におわて勝手次第相拂候様可被致候委細之儀を御勘定奉行に可被承合候。

二月

天明集成

火災賜金

十二年壬午○寶曆○紀元二四二二年二月十六日庚辰○庚辰三正綜覽芝肴町○市内芝區出火シ鹿

兒島○薩摩國城主島津重豪○薩摩守邸類焼ス幕府金一萬兩ヲ假貸ス○柳營日次記

廿二日丙戌○寶曆十二年紀元二四二二年德川宗武○右衛門督田安邸○市内麴町區亦焼ク幕

府金一萬兩ヲ賜フ○柳營日次記十一月廿七日乙酉○寶曆十二年紀元二四二二年乙酉○三正綜覽二ハ、

水戸○常陸國城主德川宗翰○中納言邸亦焼ク幕府金二萬兩ヲ賜フ○續談海

火災賜金 寶曆十二年二月十六日廿二日十二月廿七日ノ火災ハ、變災篇記ス

火災賜金事蹟

所ノ如シ。此時ノ拜借金及賜金ニ關シテハ、

廿三日○寶曆十二年二月

金貳万兩

松平薩摩守○島津重豪

名代島津淡路守

右者淨岸院様○島津繼豐室德川氏綱吉女御守殿并居屋敷類焼ニ付拜領被仰付候旨列座同

前列座 同人○秋元涼朝申渡之。

一、淨岸院様○御使小出信濃守

紅白りんを廿反 同ちりめん廿卷

同羽二重 廿疋 金三千兩

右御類焼ニ付被進之。

一、右衛門督殿○德川宗武御屋形向焼失ニ付、

御屏風 二双 御衝立 貳

海黃 廿反 金壹万兩

御簾中○ 壽丸殿○

紅白羽二重 廿疋 茶宇島廿反

右之通被進之。

霸都時代ノ救濟

同○寶曆十二
年十二月九日

金貳萬兩

衝立一脚

右御屋形御燒失ニ付被遣之。

〔附記〕 明和元年火災救濟

明和元年八月廿八日老中松平武元郎半燒シタルコト、變災篇ニ記。

八月二十九日○明和元
年○中略

時服十
若君様八丈島十反
御臺所夕白羽二重十疋

松平右近將監○武

柳營日次記

十月二日

松平右近將監

右重キ御用被仰付日光ハ罷越候儀有之處火急成ル致類燒可爲難儀与被
思召候依之金一萬兩拜借被仰付旨於奥被仰渡之。 明和日記

佃島風災拜借金

一、明和二百年八月大風ニテ、佃島石垣打崩候ニ付、町方依田豊前守○政様
御願申上候得者金五百兩餘石垣修復金ニ御拜借候事。

佃島風災
拜借金

森幸右衛門書上○佃島
名主

上野各寺修繕資金及鄉村賑給資金

上野各寺修繕費準備ノ爲メ官金一萬兩ヲ市民ニ貸付シ、同時ニ鄉村賑濟費
準備ノ爲メ官金八萬兩ヲ同ク市民ニ貸付ス。

一、明和二百年十二月廿八日、松平右近將監殿御渡御書付、左之通、

御勘定奉行

上野御宮御靈屋御別當御修復之儀相願公儀御沙汰に不被及事ニ候。然共
後年に至り大破之節は、難被拾置儀も可有之候。依之爲手當先達る上方筋
吟味之上、取上に相成候名目金銀之内、壹萬兩貸金溜置候様可被致候。貸附
方之儀は、年一割利息を以町年寄共ニ爲貸附、利金年々相納、右利金之内、爲
諸雜用、一步通り被下候段、町奉行に申渡候間、三ヶ年之内は先溜置、四ヶ年
目より右寺院に不限、無據御寄附等被仰付候諸寺社迄之直々御手當相成
候様、可被心得候。尤町奉行可被談候。

右之通被仰渡候付、依田豊前守○政
次、に懸合、町人身元等糺有之、二十人ハ一
人五百兩つ、五ヶ年季貸附、利金は翌年之正月上納之筈候。尤利附候間、家

上野各寺
修繕資金
及鄉村賑
給資金

附記
明和元年
火災救濟

質等不取置、但町年寄に被下候諸雜用は、右利金取集候内、引落候て、年々上納。

右金壹萬兩、明和三戌年二月廿四日町年寄奈良屋市右衛門、樽屋與左衛門、喜多村彦右衛門三人請取手形に、町奉行依田豐前守、土屋越前守○正、奥印形を以相渡候。

一金八萬兩 在方御手當御貸附

右は、爲在方御手當町年寄に御預、町方に御貸附に相成、年一割之利金取立。但、一ヶ年利金八千兩之内四百兩、貸附方爲雜用、町年寄に被下候積。

右之通、年々利金町年寄より翌年正月相納申候。尤御貸附高拾萬兩に相成候迄は御貸附之積之處、天明五巳年同六午年、品々御手當御繰合等にて、金七萬兩取立、御遣方金之内に差加申候。

殘る金壹萬兩 當時町年寄御預り御貸附高

誠齋雜綴

田安家拜借金

後櫻町天皇明和四年丁亥○紀元二四二七年七月、幕府德川宗武○田安右衛門督ニ金

五千兩ヲ貸ス。○天明集成

田安家拜借金事蹟

田安家拜借金 天明集成ニ、

明和四亥年七月

御勘定奉行に

近々雅姫○仲婚姻ニ付、右衛門督殿に金五千兩拜借被仰出候。返納之儀を先年三萬兩之拜借上納皆濟之上、翌年より兩年ニ不殘返濟有之筈ニ相達候間、得其意家老衆可被談候。

〔參考〕

十日○明和四年七月松平田○池相摸守重寛に、右衛門督宗武卿の息女を定婚あり。重寛が領地連年災害ありて、費用分には、宗武卿よりなげき聞え給ふによりて、別儀もて金壹萬兩かゝ給はる。

浚明院殿御實紀

安永四未年四月

田安勝手向前々より物入多、其上寅卯兩年旱、損米直段違等ニ、借入金相嵩候ニ付、右借用金片付候迄、拜借金返納御差延被仰付候様致し、度旨申聞候得共、無年限拜借返納御差延を難成事ニ付、去年分をり之積、五ヶ年之間年延被仰付置初之義を伺之通、御免被仰付候間、可成丈借金濟方勘辨致

霸都時代ノ救濟

シ、相片付候様可致候。尤右之趣を以、去年年分收納高元拂勘定帳此節差出シ、當年々諸入用減方借用金濟一、方勘辨を加拾万石之收納元拂之取計方元極委細之伺帳面可差出候。右元拂組方振合等之儀、御勘定奉行に承合、壹ヶ年限勘定帳差出方、伺之通可相心得候。

四月

右之通山水筑前守○正大屋遠江守○明に申渡候間、可被得其意候。

天明集成

〔附記〕 田安家賜金

明和五子年十月

御勘定奉行に

田安殿次男豊丸儀、松平隱岐守○定に、罕養子被仰出候に付、爲支度田安殿に金貳千兩被遣之間、得其意、家老相談可被渡候。

十月

天明集成

吟味方下役増俸

附記 田安家賜金

明和四年十二月吟味方下役増俸ノ達有リタルコト、天明集成ニ見ユ。

明和四亥年十二月

御勘定奉行に

吟味方下役小給ニ取續兼候由ニ付、向後役扶持三人扶持宛被下候段申渡候間、得其意、吟味役可被談候。

六年己丑○明和○紀元幕府淨岸院○徳川綱吉養女、島津繼豊室ニ金二千兩ヲ貸付ス。○天

明集成

淨岸院拜借事蹟

淨岸院拜借 天明集成ニ、

明和六丑年十月

御勘定奉行に

淨岸院様御類鏡以後至る御不如意ニ付、先達る御拜借有之候得共御不足其上御附女中類焼以後取續兼候者有之、御救被下度候ニ付、猶又御拜借御願被成候。無據御事ニ付、金貳千兩御拜借被仰出候間、此段可申上旨女中衆迄可被達候。御返納之儀者先達る之御拜借御返納殘金打込、來寅年より可爲拾ヶ年賦候。且亦女中に御手當之儀、御用人申談致勘辨相應ニ拜借等ニ爲被仰

幕府時代ノ救濟

九六五

付候様申上、右員數之儀追申聞候様、是又女中衆に可被達候。

十月

右之通御留守居に相達候之間、可被得其意候。

淨岸院ハ故將軍徳川綱吉養女、實ハ清閑寺氏、島津繼豐ノ室也。

附記

安永度拜借
天明集成記ス所、左ノ如シ。

安永二巳年二月

御勘定奉行に

淨岸院様御不如意ニ付、御金被進候様被成度段、兼御願被仰置候趣、誠無餘儀御儀ニ付、格別之譯を以御願之通金五千兩被進候間、右金子を以諸事無滞様可取計候、右之趣女中衆に可被達候。

右之通相達候間、得其意、御留守居に相談可被渡候。二月

七年庚寅○明和○紀元
二四三〇年閏六月七日壬午○壬午
正綜覽小石川養生所○市
内ヲ修

理ス。○明和
撰要集

小石川養生所修理 明和撰要集ニ

小石川養生
所修理

小石川養生
所修理事蹟

明和七寅年四月五日松平右近將監○武元殿
水野出羽守○忠友殿に上ル

小石川養生所御修復積再應吟味仕奉伺候書付

書面之御修復伺之通落札之者に可申付旨被仰渡奉畏候。

寅閏六月七日

牧野大隅守 町奉行

小石川養生所表門并番所藥調合所役人詰所腰懸臺所下男部屋物置所米春所病人部屋渡縁湯遣所表圍矢來裏門所々挫竹堀共、其外屋根朽損候ニ付、御修復御入用積入札申付、

(奉)此落札金高四百貳拾兩ニ御座候。

落札之者に可被仰付哉之段、去々子九月十五日依田豊前守○政
次勤役中相伺候所、積直可差上旨、去丑八月九日被仰渡候趣、左之通、

一、表門内腰懸惣躰曲之直し、柱根繼、屋根古板三分一交葺廻りひしき竹羽目新規仕直し、用立候分相用候仕様ニ候得共、ひしき竹羽目を其儘相用、其外之仕様書之通。

一、藥調合所役人詰所臺所下男部屋、屋根不殘葺直、前側掛板底下見葺葺新規仕直し、縁り通ひしき竹堀足木足竹致し、繕候仕様ニ候得共、ひしき竹堀葺葺

幕府時代ノ救濟

九六七

下見其儘差置、懸庇者釘ノ致、惣屋根古板四分一交菅ニ致し、其外仕様書之通。
一、病人部屋五棟渡廊下湯遣所并惣物置柱根繼土臺取替、屋根菅直、葺下見不殘仕直し候仕様ニ候得共、惣屋根古板四分一交菅直し、葺下見半分相用、其外ハ仕様書之通。

右之通被仰渡候間、猶又落札之者ハ申付吟味仕候所、

此落札金高四百九兩貳分銀九匁ニ御座候。

(朱) 但、先達相伺候金高ハ金十五兩一分銀六匁下直。

右積直之直段ニ申付哉之旨申上候得共、此上御入用減方之儀も可有之哉、評儀仕候ニ付、其段申上、再應見分之上種々勘辨仕、入札取之、猶又吟味仕候趣左之通ニ御座候。

一、金貳百拾八兩壹分

八町堀北紺屋町武兵衛店
三 四 郎

右者五ヶ年跡請負之積。

(朱) 但、先達積直候節之金高ハ金百九十壹兩壹分銀九匁下直。

一、右入札致し候もの共之内、通四町目横町金右衛門店五郎兵衛与申もの、金百四十八兩ニ御修復受負可申旨申候ニ付、甚御入用積も減候儀ニ御

座候間、御修復仕様之儀且身元等之儀も吟味仕候處、最初注文寫取再應見分も仕候儀ニ御座候間、積違之儀も無之候得共、一、身元輕キ者ニ御、其上證人相立候者も無之候ニ付、右五郎兵衛儀と相除申候。前書三四郎儀と二番札之ものニ付、身元等之儀吟味之上、右三四郎に申付候積相伺候儀ニ御座候。

淺草元島越町次郎兵衛店

清 七

二番札 一、金貳百拾九兩三分

(朱) 右者五ヶ年跡請負之積。

三番札 一、金貳百廿四兩貳分

右者五ヶ年跡請負之積。

大鋸町市郎右衛門店
宇右衛門

右再應吟味仕候趣、書面之通ニ御座候。則繪圖壹枚仕様帳壹册内譯帳壹册略相添奉伺候。以上。

(朱) 書面之御入用金、前々養生所附地代金ニ相渡申候、伺之通被仰付候ハ、當時右地代金御金藏に相納候間、御金受取之儀ハ、追々可申上候。

一、右金子渡方之儀も、出來方引合皆出來まで三度ニ相渡候積ニ御座候。
一、八年以來未年所々御修復有之候。

寅四月

牧野大隅守○成

曲淵甲斐守○景

〔參考〕此ノ頃ニ於ケル養生所患者數左ノ如シ。

明和七寅年二月廿八日

松平右近將監殿上ル
水野出羽守殿

松平因幡守殿
白須甲斐守殿

明和五子年同六丑年迄小石川養生所病人數之儀申上候書付

〔曲淵甲斐守
町奉行

明和五子年十二月朔日同六丑年十一月晦日迄養生所ニ來候病人數
一、貳百五拾六人

内

百四拾壹人

全快之者

三拾人

難治ニ付相歸候者

六拾八人

願ニ付相歸候者

拾四人

病死致候者

三人

欠落致候者

右之通御座候以上。

寅二月

牧野大隅守

曲淵甲斐守

明和撰要集

明和九年大
火救濟

後桃園天皇明和九年壬辰○十一月廿五日改元安永元年紀元二四三二年二月江戸大火ス。幕府

懼災老中以下ニ金ヲ貸與若クハ給賜ス。○明和日記續談海
明和錄天明集成

明和九年大
火救濟事蹟

明和九年大火救濟 明和九年ノ大火ハ明曆大火後ノ大災ト稱セラレ市中ノ

大半ヲ灰燼ニ付ス。事具シテ變災篇ニ載ス。是時ニ於ケル幕府救濟ノ所傳明カ

ナル者下記ノ如シ。

明和九辰年三月○明和日記
十七日

御勘定奉行ニ

松平右近將監○武元

屋敷類焼可爲難儀与思召候。依之金壹万兩拜借被仰付。

但、打續類焼ニ付、別カ可致難儀候間、此度拜借返納之儀カ先達カ類焼之節

拜借之分返納相濟候翌年カ拾ヶ年ニ返納可有之候。

右之通可被得其意候。

明和九辰年三月

御勘定奉行ニ

松平右京太夫○輝高

松平周防守○康福

板倉佐渡守○勝清

幕府時代ノ救濟

九七一

田沼主殿頭次○意 阿部豐後守九○正

屋鋪類焼可爲難義も思召候。依之金壹万兩ツ、拜借被仰付候。

水野壹岐守見○忠 酒井石見守休○忠 加納遠江守堅○久

水野出羽守友○忠 鳥居伊賀守意○忠 酒井飛騨守香○忠

同斷ニ付、金五千兩ツ、拜借被仰付之。
御側衆○明和日記、御用取次、御側衆。

稻葉越中守明○正 白須甲斐守賢○政 佐野右兵衛尉承○茂

同斷ニ付、金貳千兩ツ、拜借被仰付候。

同 ○明和日記西丸。 松平因幡守郷○康 巨勢伊豆守忠○至 津田日向守之○借

○明和日記西丸。 大久保志摩守翰○忠

同斷ニ付、金千兩ツ、拜借被仰付之。

但、上納之儀、來巳年々十ヶ年ニ返納可有之候。且又主殿頭儀相其城地被下、新規普請追々出來、又候過分之普請も致し候儀ニ付、此度拜借上納之儀、來巳年々五ヶ年御用捨被成下、來ル戌年々十ヶ年ニ返納可有之候。

右之通可被得其意候。○明和日記同。

明和九辰年四月

御勘定奉行レ

當二月廿九日出火之節、類焼之面々、此度拜借金并御救金被下候ニ付、中奥御小性之内部屋住無足之者々々、爲御手當銀三十枚被下候。御勘定奉行相談可受取候。

右之通相達候間、得其意可被相渡候。 四月

明和九辰年四月

御勘定奉行レ

大納言様御伽 溝口金彌 津田金之丞

當二月廿九日出火之節、居室類焼ニ付、爲御手當銀三拾枚ツ、被下間得其意可被相渡候。 天明集成

廿六日○明和九年三月

一、此度類焼ニ付、拜借被仰付候。

金壹万兩ツ、老中 同五千兩ツ、若年寄

同貳千兩ツ、稻葉越中守 白須甲斐守 同千兩ツ、佐野右兵衛尉

十五日○明和九年四月

霸都時代、救濟

一、左之御書付松平右近將監^{○武}三通被相渡之。

大目付^レ

當二月廿九日目黒邊并丸山邊^レ出火之節、風烈ニ及大火候故急ニ類焼別^レ可致難儀候、依之御奉公相勤候千石以下地方取御切米取共、左之通拜借金被仰付候。金子之義^レ御勘定奉行相談可請取候。上納之儀も御勘定奉行^レ可承合候。

- 一千石 金五拾兩 一、九百石 金四拾五兩
- 一、七百石 金四拾兩 一、六百石 金三拾五兩
- 一、五百石 金三拾兩 一、四百石 金廿五兩
- 一、三百石 金二拾兩 一、二百五十石 金十七兩
- 一、二百石^ノ 金拾五兩

一、御足高御足扶持共拜借金被仰付候事。

一、御役料^レ相除候事。

一、御扶持方取十八扶持^ヲ五拾俵之積たるへき事。

一、高ニ附候御扶持方^レ相除キ候事。

右之通向々^レ可被相觸候。

大目付^レ

當二月廿九日目黒邊并丸山邊^レ出火之節、風烈ニ及大火候故急ニ類焼別^レ可致難儀候、依之地方取御切米^{○取}脱^{○歟}とも御奉公相勤候者御足高共ニ百俵^ノ以下之者共へ爲御救左之通御金被下候。金子之義^レ御勘定奉行相談可請取候。

- 一、百俵^ノ 金七兩 一、七拾俵^ノ 金五兩
- 一、八拾俵^ノ 金七兩 一、五拾俵^ノ 金五兩
- 一、四拾俵^ノ 金三兩 一、二拾俵^ノ 金二兩
- 一、三拾俵^ノ 金三兩 一、一拾俵^ノ 金二兩
- 十四俵^ノ以下 金壹兩

右之通向々^レ可被相觸候。

大目付^レ

今日拜借被仰付候面々、且御救被下候者共并頭々爲御禮、老中豊後守御本丸西丸若年寄^レ可被相廻候。

但、頭支配有之分^レ、其頭支配^レ爲御禮罷越候様ニ可仕候。

右之通可被相達候。^{○天明集成同}

九日[○]明和九年五月[○]欄外ニ、此事十日也ト細書アリ。

幕府時代ノ救濟

金五千兩

土井大炊頭○利

名代土井遼江守

其方領分打續損毛其上在所出火且又於京都御大禮段々物入等有之此度居屋敷類燒旁難義ニ付○明和日記此間ニ、拜借金之儀被相願候去ル寅年拜借金被仰付去燒差當難儀之由ニ付、ト有り格別之思召を以拜借被仰付之旨老中列座主殿頭○田沼意次傳達之。

○明和日記同。

柳營日記

同○明和九年三月十七日類燒ニ付、

一金壹万兩ツ、御老中方

一金五千兩ツ、若年寄

一金二千兩ツ、御用取次兩人

一金千兩ツ、御側衆

右十ヶ年賦拜借被仰付候右近將監殿と先達之御拜借相濟候る十ヶ年賦主殿頭ニも居城普請ニ付卯年と五年過る十ヶ年賦御返納有之旨被仰渡候。

續談海

六月

○明和九年十一月廿五日改元安永元年紀元二四三二年幕府德川治濟○一橋家金三萬兩ヲ貸ス。九

月○明和九年紀元二四三二年德川治察○田安大藏卿亦三萬兩ヲ借ル。○天明

○天明

一橋家清水家拜借 天明集成ニ據ル、

一橋家清水家拜借

一橋家清水家拜借事蹟

明和九辰年六月

御勘定奉行ト

民部卿殿○德川治濟御勝手向御差支ニ付公儀ト御賄之御願ニ候得共此度と不及御沙汰候然共御難澁之段達御聞格別之思召を以金三万兩御拜借被仰出候。

但返納之儀前々御拜借返納殘金貳万七千兩共合五万七千兩當辰年と二十ヶ年賦年と金二千八百兩ツ、上納有之候。

一前々御拜借等も不少尤去々去年御領知早損ニ付御勝手向御差支之由を以公儀ト御賄等之義御願有之候ニ付此度格別之譯を以御拜借被仰出候事候間如何様ニも右御拜借金高ニ御間合候様取計尤此上御勝手向常々ゆる々無之様末々役人等ト申渡以後御難澁之義無之様心懸を可致出情候。

右之通民部卿殿家老ト相達候間可被得其意候。

明和九辰年九月

御勘定奉行ト

幕府時代ノ救濟

大藏卿殿○德川治察御勝手向御差支御難澁之段達御聞格別思召を以御願之通金三万兩御拜借被仰出候。

但返納之儀之、前々御拜借返納殘金壹万四千兩共合四万四千兩當辰年拾五ヶ年賦年々金貳千九百三十兩餘ッ、上納有之候。

一前々御拜借等も不少尤去々去年御領知早損ニ付御勝手向御差支之由ニ付格別之譯を以御拜借被仰出候事候之間如何様ニも右御拜借金高ニ御間ニ合候様取計尤此上御勝手向常々ゆる々無之様末々役人等にも申渡以後御難澁之儀無之様心懸可致出情候。

右之通大藏卿殿家老被相達候間可被得其意候。九月

〔附記〕 一橋家安永度拜借

安永五申年二月

御勘定奉行

民部卿殿○德川治濟日光被參詣候付る武器等之入用大造之儀ニ付金壹萬兩御拜借被仰出候御返納之儀之貳十ヶ年賦可致上納旨民部卿殿家老に相達候間可被得其意候。

天明集成

附記
一橋家安
永度拜借

安永二年疫
癘救恤

安永二年癸巳

○紀元二
四三三年

春江戸疫癘行ハル幕府庶民ニ人參ヲ施與

ス。○浚明院殿御實紀。曳尾
庵隨筆。後見草。武江年表。

安永二年疫癘救恤

此春頃○安永二年より疫癘しきりに行はれ下賤のやから多くまぬかる、事なかりしかば、おほやけにもあはれませ給ひ、人蔭を下し給はりて御救ひあり。

浚明院殿御實紀

安永二年巳諸國疫病流行人多く死す、公儀より日光人參を被下置。

曳尾庵隨筆

其年○安永元年の冬より同じき二年の春に至り、疫病天下に行はれ、就中東海道は甚敷死したる人も多しとかや、抑當度の疫病は去る明和四年に行はれし感冒といことかはり、其毒の強き事筆にも詞にも盡しかたし、一人として助る者は聞さりき、遠江國日坂の宿杯にては、人種も盡る計に死けるよ、江戸にても餘りに死ける故、公よりの御救として、人參といふ藥を賤しきものに給はるなり。

後見草

三月末頃より疫病行れ人多く死す。江戸中にて三月より五月まで凡十九御救といふ、大方中人以下あり。

霸都時代ノ救濟

九七九

安永二年疫
癘救恤事蹟

て朝鮮人參を給はる。

〔附記〕 薪炭價額制限

六月二十四日○安永二年

武江年表

附記
薪炭價額
制限

別紙卷上

松平右近將監○武元殿御渡候御書付寫

御奏者番衆 寺社奉行衆

大目付に

炭薪直段之儀、近頃高直ニ付、於町奉行所吟味之上、直段引下ケ致賣買候様申付候間、世上相對ニて買受候儀とハ乍申格別高直ニ致賣買候炭薪屋共も有之、銘々買受候者之差支ニも相成候ハ、其炭薪屋共之名前町處相糺町奉行に相達候様可致候。右之趣、諸向爲心得寄々可被相達候。

六月

廻狀留

三年甲午○安永〇紀元二四三四年

正月十四日戊辰○戊辰三正綜覽

幕府江戸町人ニ低利

米穀買入奨
勵及圍糶

米穀買入奨
勵及圍糶事

金ヲ貸付ケテ、米穀ノ買入ヲ爲サシメ、一面幕領及諸侯封内ニ圍糶ヲ爲ス。以テ米價ノ引上ヲ計ル也。○明和撰要集

米穀買入奨勵及圍糶 米穀買入奨勵ハ

安永三年正月十四日松平右近將監○武元殿御直ニ御渡翌十五日大隅守○牧野成賢談之上、兩名取計ニ可致旨申談同日奈良屋市右衛門に内座ニ申渡此寫も相渡。

町奉行に

米相場之義今以下直ニ有之候段、米買請人其外圍米等いゝ候者無數故と相聞候。畢竟類焼等ニ手廻惡敷、元手金差支賣買仕兼候儀ニも可有之哉。付買入元手金差支候者共相願候ト壹ケ年五分之利足を以、十ケ年賦返納之積貳朱判ニ多六七万兩を御貸附金可被仰付候間、淺草藏前并河岸八町米問屋共致吟味可被申聞候。尤委細之義ハ御勘定奉行可被談候。正月安永三年正月十八日大隅守○牧野成賢に談之上相渡、翌十九日少々附紙ニ被致御城ニ申請取、同廿日川井越前守○久に達ス、同廿二日御勘定所下札ニ申挨拶有之、請取候旨大隅守○牧野成賢差越。

幕府時代ノ救濟

御勘定奉行衆¹²

牧野大隅守 曲淵甲斐守

米相場下直ニ付、買ノ差支候者共相願候ハ、壹ケ年五分之利足を以、拾ケ年賦返納之積御貸附可被仰付候間、淺草藏前并河岸八町米問屋共吟味可致旨被仰渡候ニ付、左之通及御懸合候。

右ニ當午年ノ拾ケ年賦之積當暮ノ年賦割合拾分一宛年ノ上納爲致、來未正月ノ利金も御藏納爲致候積取計可申候。

一、右御書付ニ淺草藏前と有之候ハ、淺草御藏前札差共之儀と相心得罷在候。河岸八町ニ米仲買共多住居致シ、米問屋共ニ漸五六人程ならてハ無之候得とも、右御書付之通米問屋共ニ計御貸附可有御座候哉。

一、御貸附金之儀を前ノ隨分身元慥成町人共相糺所持之家屋敷ケ所沽券金高等相調、貸付候儀ニ御座候處、元手金差支候ものニ引當相應之家屋敷所持致し候ものニ無數可有之哉、前書之通引當丈夫ニ身元慥成者ニ此度之御貸附金相願申間敷哉ニ付、拜借金相願候もの有之次第少分ニ引當有之候ハ、御貸附申付候様取計可申候。

一、淺草御藏前并河岸八町米問屋共ニ限り、御貸附被仰付候ると、河岸八町

米問屋共ハ少人數ニ有之候間、其外之米問屋にも申渡、相願候もの有之候ハ、御貸附被仰付可然哉ニ付、其段取調相伺可申候。

一、淺草御藏米札差共河岸八町米問屋とも、壹人別ニ貸附候ると、引當物等ニ差支、拜借仕候者無數可有之哉ニ候間、御藏前惣札差共何万兩、米問屋共何万兩、其組合一統に貸附候ハ、仲ケ間内ニ相互ニ品々之引當差出、銘々身上高ニ應シ、割合拜借可仕候哉、左候得ハ取立候節、惣仲間ノ取立申候間、取立方ニ差支有之間鋪候。右之趣ヲ以取調相伺候様可致候。

右之趣及御懸合候。 午正月

下ケ札

壹

御書面取立方之儀被仰聞候通り當暮ノ拾ケ年賦之積尤當暮ノ可納分、來正月元金利金共御藏納之積リニ宜御座候。

貳

御書面淺草御藏前と有之候ハ、札差共之儀ニ有可御座候。且河岸八町之儀ニ、問屋五六軒有之、仲買多御座候由、右ニ仲買之もの共にも御吟味次第ニ、御貸附之積御伺有之可然存候。

三

御書面之趣ニ御吟味次第之儀と存候。

御書面河岸八町ニ限り不申其外之問屋ニあるも相願候ハ、御貸附之積
四
リ御伺有之可然存候。

御書面御存寄之儀御伺被成可然存候。

右御懸合之趣下ケ札を以及御挨拶候。

午正月

石谷備後守○清

川井越前守○久

安永三年二月八日水野出羽守○忠殿ニ御直ニ松平右近將監○武殿ニ上候
分共兩人一同上之。

米直段下直ニ付元手金御貸附之儀申上候書付

牧野大隅守

曲淵甲斐守

米相場下直ニ付買入差支候者共相願候ハ、御貸附可被仰付候間、淺草藏前
并河岸八町米問屋共吟味仕可申上旨被仰渡候ニ付、町年寄共ニ申付相糺候
處御藏米札差共河岸八町米問屋共拜借願金高少分ニ御座候間、河岸八町米
仲買地廻り米問屋共拜借金相願候もの後可有御座と、右之者共をも相糺候
處銘々左之通ニ御座候。

一、淺草御藏前札差共申立候ハ、一躰右仲間之儀を米買入商賣仕候者共ニ無

御座諸家ニ相渡候御藏米引請取計、或ハ相拂勘定仕立候儀ニ有、外ハ米買請
候儀ニ無之候得共、金子手廻り候者ハ、米直段之高下ニ寄諸家ハ請取候米圍
置候儀も御座候間、右米圍置候ハ、拜借相願候ニ付、身上薄き者共ハ難相願
殊更右身上薄き者拜借仕候ハ、返納之節差支之程も難計、恐入候儀ニ御座
候間、惣札差共之内貳拾二人ニ有、貳朱判壹萬四千六百兩分拜借仕度旨相願
申候。尤右拜借仕米圍置候ハ、直段引上候程も難計、萬一相場下直ニ相成候
ハ、損金ニ相成候上、利分上納仕候義ニ御座候間、過分之拜借奉願兼候旨
申立候。

一、河岸八町米問屋共申立候ハ、右御金拜借仕米買入候ハ、直段引上可申哉
其段難計、若其頃迄も圍置候程之儀ハ御座候ハ、極暑之時分米いふと、欠米
も相立、其外失脚も相懸り候故、少々之相場上リニ有、ハ買徳無御座、損金ホカ
らも右圍米相拂候上ニ有、五分之利分上納仕候儀ニ御座候間、過分之金高拜
借難相願、殊更右河岸米問屋共追々商賣相休當時問屋五人有之、右五人ニ有
貳朱判五千兩分拜借奉願候旨申之候。

一、米仲買共申立候ハ、仲買之分凡身輕キ者共ニ有、過分之拜借奉願兼候間、仲

問一統に五千兩分拜借奉願候旨申之候。

一、地廻り米問屋共之儀を相應之引當御座候者之人数無數、問屋四人ニある四
千兩分拜借奉願候旨申之候。

右相糺候趣、書面之通御座候。尤是迄御貸附金仕候節を隨分身元體成もの共
相糺所持之家屋敷ケ所沽券金高等相調貸附候得共、右躰手厚きもの共を元
手金拜借相願不申候間、此度拜借相願候者共、相應之引當テ御座候ハ、貸附
候様可仕候。依之前書之金高貳萬八千六百兩分、先請取候積り御勘定奉行に
申談候様可仕候。猶又此上拜借金奉願度候もの申出候ハ、其節可申上候。以
上。

午二月

牧野大隅守○成賢

曲淵甲斐守○景漸

安永三午年二月九日川井越前守○久敬に達、同日同人より大隅守○成賢、牧野請取。

牧野大隅守 曲淵甲斐守

先達及御懸合候米相場下直ニ付、買入差支候者共に御貸附之儀、相糺候處
淺草御藏前札差共、河岸八町米問屋共拜借願金高少分ニ付、河岸八町米仲買
并地廻り米問屋共をも相糺候處、右之者共後拜借相願候間、御貸附被仰付候

積り、右近將監殿○松平武元、出羽守殿○水野忠友に申上金高左之通御座候。

一、貳朱判壹万四千六百兩分 淺草御藏米札差共之内 貳十貳人

一、同五千兩分 河岸八町米問屋共 五 人

一、同五千兩分 河岸八町米仲買 惣 仲 間

一、同四千兩分 地廻米問屋之内 四 人

右之通相願申候、御金請取方之儀ハ、前々御貸附金之通相心得取計、町年寄共
に爲受取候様可致候。尤返納之節ハ、金并貳朱判ニあるも勝手次第上納爲致候
積りニ御座候。依之猶又及御懸合候。○

午二月

下ケ札

御書面之趣致承知候。

二月

石谷備後守
川井越前守

安永三午年二月十四日川井越前守○久敬に達ス、同晦日大隅守請取同人より來
ル。

牧野大隅守 曲淵甲斐守

米直段下直ニ付、買入元手金御貸附金○年々元利返納之節、金并貳朱判ニある

幕府時代ノ救濟

も勝手次第上納爲致候積及御懸合候處、右返納之節皆貳朱判又ハ金并五匁銀取交候共勝手次第取集上納致度旨町年寄共申立候間、猶又此段及御懸合候。午二月

下ケ札
御書面返納方之儀、皆貳朱判又ハ金并五匁銀取交相納候共、差支之筋無御座候。
二月
石谷備後守
川井越前守

貳朱判請取手形案

請取申貳朱判之事

貳朱判貳万八千六百兩 銀座包

右者米相場下直ニ付、買入圍米等爲元手金淺草御藏前札差并米問屋河岸八町米仲買、其外地廻り米問屋之内、相願候者どもハ一ヶ年五分の利足を以拾ヶ年賦返納之積御貸附被仰付候金高之内、書面之通貳万八千六百兩分請取申候。返納之儀ハ、當午年ハ卯年迄十ヶ年賦利足之儀ハ、年五分の積、當午年ハ二月ハ十二月迄十一ヶ月分來年ハ元金年ハ返納相減候ニ付、利足金後右割合を以取立候積、尤每暮上納之分翌春も取立之上納可申候。勿論十ヶ年目

皆納之節、納札を以此手形引替可申候。仍如件。

安永三年二月

奈良屋市右衛門 喜多村彦右衛門

樽屋藤左衛門

久野平四郎殿 谷田又四郎殿 伊東太次右衛門殿

右之通相違無御座候。以上。

牧野大隅守 曲淵甲斐守

安永三年五月廿九日川井越前守に達、同七月廿四日致下ケ札、同人ハ請取同廿五日大隅守扣遣、同日下ケ札之通町人共ハ申渡書付相返候様奈良屋市右衛門に申渡。

牧野大隅守 曲淵甲斐守

先達被仰出有之候米相場下直ニ付、買入差支候者共、貳朱判御貸附之儀被仰出之金高ニ未相満不申候ニ付、此度猶又左之者共相願候間、御貸附之積取計可申与存候。

- 一、貳朱判壹万四千百兩
- 一、同千百兩

淺草御藏前札差共 拾八人
同所御城米納宿共 四拾人

- 一、同千貳百兩
- 一、同千九百兩

河岸八町米問屋之内
小網町一町目家持
甚右衛門
地廻り并鎌倉町米問屋共
三八人

右之通申出候先達を被仰出候節分間も有之候間、及御懸合候。 午五月

下ヶ札
御書面之趣致承知御貸渡方之儀相伺候處、此節へ先御貸附ニ及申間
敷旨、松平右近將監殿被仰渡候間、左様御心得可被成候。依之及御挨拶
候。

午七月

石谷備後守
川井越前守
明和撰要集

圍籾ハ、

安永三年正月

御勘定奉行に

當午年豐作候え、於御料所も圍籾被仰付候ニ付、万石以上之面、後收納米之内、分限高一万石ニ付、籾千俵宛圍置并江戸廻米高之内、是又二分通相減候様可被致候。

右之通万石以上之面、に相達候間、可被得其意候。 正月

安永三年九月

御勘定奉行に

當午年風水損等之場所も有之候得共、先え出來方相應ニ相聞候。依之先達を相達候通、於御料所後圍籾被仰付候間、万石以上之面、も出來方相應之場所え、收納米之内、分限高壹万石ニ付、籾千俵宛圍置候様可被致候。尤江戸廻米高貳分通相減候ニえ不及候。

右之通万石以上之面、に相達候間、可被得其意候。

九月

天明集成

六年ニモ申合有リ。

安永六酉年九月

御勘定奉行に

去ル午年、米直段下直ニ付、御料所ニも圍籾被仰付候ニ付、万石以上之面、も分限高壹万石ニ付、千俵宛圍籾被致候様申達候處、追々米相場上候ニ付、御料所圍籾之儀、後被差止候間、万石以上之面、圍籾之儀も、此節勝手次第取計候様可被致候。 九月

右之通相達候間可被得其意候。

天明集成

附記
諸色直段
引下

〔附記〕 諸色直段引下

安永三年十一月十二日

諸色直段引下ケ可申旨町觸

諸色直段之儀今以高直之旨相聞候。右之先達之當表并伏見共、鐵錢吹高御差止、真鍮錢之儀吹高半減被仰付候間、錢相場引上、諸色直段錢相場ニ鈞合候様引下可致賣買旨相觸候所、錢相場而已引上、諸色ハ今以引下ケ不申段不届之至候。追日錢相場も引上候事候間、此上諸色之儀急度引下、錢相場も鈞合候様可致賣買候若右之趣於相背之、吟味上嚴敷答可申付候。此旨町中不殘可觸知者也。十一月

安永四年六月十九日

諸色直段并諸賃銀高直ニ仕問敷儀付町觸

諸色直段之儀、度々相觸候得共、免角引下ケ不申趣相聞候。右之先達之鑄錢吹方も御差止有之、錢相場も段々引上ケ候處、今以諸色引下ケ不申段、甚不埒之事ニ候。世上諸色之儀急度引下ケ、錢相場も鈞合候様可致賣買候。別る

小賣商致し候もの元相場ニ應し商賣可致所、元相場下直ニ相成候も、暫之小賣引下ケ不申、相場高直ニ相成候節、小賣も早速引上ケ、自分之勝手而已ニ商致し候者も有之趣相聞、是又不届之至ニ候。右時之相場ニ應し、直段下直之節、早速小賣も引下、下々難儀ニ不成様可致商賣候。但、國々之元直段無謂高直ニ賣出し候も有之候ハ、其筋之商賣人共可申出候。

一、去ル辰年大火ノ付、其節分諸職人並人足等賃銀高直ニ相成候。然處當時ニ有レ辰年以前ニ立戻り可申處、今以辰年以前ニ不立戻趣相聞候。先達之諸賃銀之書付等差出候得共、右之書出し候而已ニ有、實々右之通ニ有無之内、ニ有レ賃銀今以高直之趣相聞、甚不埒之至ニ候。右ハ一統難儀ニ罷成殊ニ御普請御修復御入用も響キ候間、早々前々下直之節ニ立戻り可申候。

右之趣若相背、此上諸色直段并諸賃銀高直之趣相聞候ハ、吟味之上嚴敷答可申付候條、此旨町中可觸知者也。未六月○正寶錄續同

安永五年正月廿九日相觸ル

霸都時代ノ救濟

九九三

諸色高直ニ付町觸

諸色直段之儀下直ニ可致旨、是迄度々相觸候得共、今以直段引下ケ不申段、甚不埒之事ニ候、其品ニ寄船間等ニ有拂底之節、元直段等高直ニ相成候故、夫丈一躰之直段少々高直ニ賣買いし候儀も可有之候得共、其品着船有之候も、一旦直段引上候品も、申譯計リニ少々直段引下候迄ニ有、元直段ニ有決り不致候、其外拂底ニ有無之品ニ有も、矢張高直ニ賣買致し候段、全商賣人共自分勝手而已、商ひ致し候趣相聞、甚不届之至候、元相場下直ニ相成候も、小賣等と別有直段引下ケ不申、元直段高直之節之通賣買致し候間、輕者共と勿論一統難儀致し候趣ニ相聞候、其上當四月日光御社參も有之候間、旁前書之通諸色直段引下ケ可申候。右之趣不相用、此上直段引下ケ不申、高直ニ商賣致し候もの有之候ハ、吟味之上當人ハ勿論、町役人共迄嚴敷答可申付候條、此旨町中可觸知者也。

申正月○正寶
錄續同。

天明集成

火災救濟

十二月十二日辛卯○安永三年紀元二四三四年○辛卯三正綜覽 小石川藥園○市内小石川區 火ヲ失シ、
德川治保○水戸參議 邸長屋亦類燒ス。幕府治保○德川ニ金壹萬兩ヲ假貸

火災救濟事蹟

ス。○安永日記
天明集成。

火災救濟

左ノ如シ。

水戸殿家老

山野邊兵庫頭

右水戸殿御勝手向近年差支ニ付、格別儉約御申付被置候處、此度御長屋向數多類燒、差當り御難澁ニ付、拜借並是迄之拜借返納差延之義御願ニ候、依之金一萬兩御拜借、且當暮御返納分御差延被仰出之候、此段可申上之旨、於芙蓉之間老中列座、右近將監○松平武元相達之。
安永三年十二月

安永日記

御勘定奉行

御勝手向近年差支ニ付、格別儉約御申付被置候處、此度御長屋向數多類燒、差當御難澁ニ付、拜借並是迄之拜借御返納差延之儀御願候、依之金壹萬兩御拜借、且當暮御返納之分御差延被仰出候。右之通水戸殿家老々相達候間、可被得其意候、御返納之儀、先格之趣を以可被相伺候。

天明集成

附記
伊奈氏恩借

附記

伊奈氏恩借

霸都時代ノ救濟

安永三年十一月

御勘定奉行

御代官 伊奈半左衛門○忠敬

右前々勝手向不如意之上、近來打續知行損毛類焼等ニ差支御用向も難相勤趣ニ候、先年格別之譯を以御手當も被成下候上之、難相成事ニ候得共品々御用も多、勝手向差支候儀も無據趣ニ付、猶又別段之譯を以、金壹萬五千兩十五ヶ年御預被仰付候、冥加金等之御沙汰ニ不及候間、右御手當を以如何様ニも取續、以後願ヶ間敷義等申立間敷旨、可被申渡候。

十一月

天明集成

佃島火災救濟

七年戊戌○安永○紀元二月十二日癸卯○癸卯、三正綜覽石町○市内日木橋通出火、鐵炮洲

○市内京橋區ニ延燒シ、佃島○市内京橋區亦燒ク。○變災篇參照幕府佃島○市内京橋區漁夫ニ拜借

金ヲ許可ス。○明和撰要集

佃島火災救濟

佃島火災救濟 明和撰要集ニ見ユ。他ノ各町亦救恤セラレタルヤ否ヤヲ知ラズ。

安永七戌年六月十七日松平右近將監殿 酒井石見守殿石見守殿○酒井忠休に兩人一同御直ニ上ル、閏七月十二日大前熊次郎○明房を以御下、同十四日承附、同人を以返上。

佃島獵師共類焼ニ付御金拜借奉願候儀申上候書付

書面伺之通拜借金五百兩、町方納金之内、貸渡返納之儀、來ル亥年、申年迄、十ヶ年賦之積可申渡旨被仰渡、奉畏候。

戊閏七月十二日

牧野大隅守

曲淵甲斐守

佃島獵師共願出候之、近年打續不獵ニ困窮仕罷在候所、當二月十二日日本石町、出火仕候節、佃島に飛火仕、家居類焼仕、其上、汝干瀉ニ海端に持出候網船之道具并家財等迄、不殘燒失仕、貧窮之者聊之貯も無御座、難儀至極仕、妻子相育可申手當無御座、前々御茶肴差上、網御用相勤來候處、若獵師共他所に散々ニ相成可申哉、一同歎敷奉存候、何卒獵師共住居取續入用、御慈悲を以御金千兩拜借被仰付被下置候様奉願候、返納之儀、來亥年、十ヶ年賦ニ上納可仕旨、獵師惣代組頭共名主差添、一同願出申候。

右之通願出候間、吟味仕候處、當二月十二日風烈敷、佃嶋惣家數百八十軒之内、五軒相殘、其外不殘類焼仕、網並船道具家財等迄、燒失仕、家業相續仕兼候段、相違も無御座候。佃嶋之儀、御茶肴網御用等も相勤候者とも、故、類焼之度々拜

幕府時代ノ救濟

借被仰付候先例も御座候間、金千兩拜借相願候得共、類焼之者百七十五人、此度も金五百兩拜借可被仰付候哉奉伺候以上。

(朱)但、元祿十五年、元文四年、仙島類焼仕候度、金五百兩宛拜借被仰付、元文四年、家數百四十壹軒焼失仕、其節も金千兩拜借仕度旨相願候得共、金五百兩拜借被仰付、此度類焼之家數格別之相違も無御座候間、本文之通、金五百兩拜借可被仰付哉奉伺候、尤先年拜借之節、關所金之内を以、拾ヶ年賦返納之積相渡申候間、伺之通拜借被仰付候ハ、此度も關所金之内を以相渡候様可仕候。

戊六月

牧野大隅守 曲淵甲斐守

(朱)右近將監殿御直ニ、御茶肴御用相勤候ニ付、拜借被仰付候ニ、關所金之内ハ貸渡候段、例々有之候得共、如何之方被仰聞、御尤之御事難有思召之旨、御答申上候事。

附記
火災救助

〔附記〕 火災救助

安永七戌年十月

御勘定奉行

本多中務大輔○忠典

先祖御奉公筋目有之候處、度々家督所替屋鋪類焼等、其外打續事立候物

入有之、居城及大破候得共、修復難及力由、無據儀ニ相聞、場所柄之儀ニも有之ニ付、格別之思召を以、金壹万兩拜借被仰付候。上納之儀々、來亥年拾ヶ年賦可有返納候。尤御勘定奉行可被承合候。十月
安永八亥年十二月

御勘定奉行

民部卿殿御勝手向、先年御屋形焼失以來、手繰差支、其外御物入多、御難澁ニ付、御手當之儀被相願度由ニ候。至、御難澁之趣ニ付、格別之譯を以、是迄之御拜借返納十ヶ年御差延、右年限中、爲御手當年々金三千兩ツ、被進候間、其段可被申上候。尤御勝手向致勘辨、右年限中御勝手向取直シ、御拜借返納も片付候様、可被取計候。十二月

右之趣、民部卿殿家老ニ相達候間、可被得其意候。尤御金之義々、在方御手當御貸附金、利金之内ハ相渡候様、可被致候。
天明集成

光格天皇安永九年庚子○紀元二四四〇年六月、江戸大水、幕府窮民ヲ救助

ス。○後見草。武江年表。

大水救助 八、

幕府時代ノ救濟

大水救助

大水救助事蹟

安永九年夏幾日ともなく大雨降、利根川・荒川・戸田川をさきとして、關東の大
河の限り水溢れ堤崩れ、武藏下總一面ニ地卑の方ハ洪水せり、誠に山をかね
岡ニ登る勢ニて、田畑とも見えわかば、大海原の如クニなり、人家數多押流せ
り。是によりて御府内第一と聞えさる兩國川の水をやく、矢をつくより早
し、永代橋・新大橋も一時ニ碎落たり。公ニハ此事をやく聞し召、急き窮民救ん
と御郡代伊奈殿に仰せて、數十艘の船を集め、米錢數多積載て、村々ニ分配り
給ひたり、然るに此水引兼て其所や此所ニた、へし程、救ひの者ともよる
へなく、漸々漕廻り、常ニハ高しと見なしたる大木の上枝、彼船を繋きとめ、
十日餘りも過せしとそ。其役またつさわりし卑官どもの歸り來て語りし也。

後見章

六月○安永九年大雨降續き、廿六日より江戸近在利根川・荒川・戸田川洪水、村々人
家を流し、永代橋・新大橋落る、助船を以此難を救せらる。七月より米價貴し。

武江年表

無宿養育所
設置

十月廿四日己巳○安永九年(紀元二四四〇年)己巳(三正綜覽) 深川茂森町○市内ニ無宿養育所ヲ
設ク。○安永撰要類集、御府内雜話。

無宿養育所
設置事蹟

無宿養育所設置

ハ、

安永九子年十月廿四日於御城大隅守○牧野より受取。

曲淵甲斐守殿レ

牧野大隅守

此度於深川茂森町無宿養育所被仰付、致出來候ニ付、無宿共追々差遣候間、御
掛り無罪之無宿有之候ハ、拙者方ハ御引渡可被成候上、右養育所ハ差遣可
申候。尤養育所ハ難差遣分ハ、佐州ハ可差遣候。右ハ主殿頭殿○田沼伺之上
御達申候。子十月

安永撰要類集

一、御府内穢多共非人共ものもらひこもかぶり願入房迄、近年甚不、宜事多、町
方門々にて雜言を大に言りて難儀いたさせ、大勢にて騒立、其紛れニハ手あ
たり次第の盗いたし、誠に相手に不相成事故、至る之難儀之事なり。又願入房
主と申ものは、多勢組合、さましくならし物を持歩行、諸商人の店々へものい
ふ事も不聞やうに騒歩行ものもらひの姿は無御座、又姻禮葬禮の節も、福者
錢五メ文十メ文非人ハ差出し仕切申ス事にて、途中ハ番非人一人宛相添、守
護いたさせ候得、難儀の筋も無之候得共、貧家は左様ノ事も出來不申、葬送
仕候得共、途中ニハ非人男女五十八も七十人も取まき候、大に難儀いさし

霜都時代ノ救濟

候儀度々見かけ候。惣右頭分之者不行届、是も町方名主同様よて、驕り計ニ
 多、自分御奉公の筋も不存配下之前ニ多、我儘計申也。驕よふけり候哉ニ奉存
 候。先年牧野大隅守成賢様思召付之由ニ多、深川六万坪邊に慈悲牢と名つけ、
 無宿こもかぶり無罪なるものを御入置キ被成候。病人ニ無之分ハ、何ニ多
 も職分被仰付、其上産れ國方へも段々御たつねありて、一年も二年も御養ひ、
 其上ニ多歸國も可被仰付之思召ニ多、有之御催し及承候處、只今は其沙汰無
 之候。是等ハ廣大成御慈悲ニ多候。盗人ト相成候初は食物無之故之事も多か
 るへし。右之慈悲牢の思召もよく取り候ハ、御府内之御取り方第一番
 ニ可相成事ニ候。又悪く取計ひ候ハ、破れよも可相成候事ニ候。せめて小兒
 ノ菟かぶりの内よは、生長して人間ニ可相成ものも有も可仕哉と奉存候。其
 内ニ多養育の世話も出來可仕事ニ候。御工夫被下度事也。

御府内雑話

恰モ人足寄場ノ前身トモ見ル可キ者也。其成功ヲ見サリシハ惜ム可シ。

〔参考〕 牧野成賢

成賢成賢○牧野 大九郎。朝貢織部。大隅守。從五位下。

實は牧野越前守成熙か二男。母は綾小路中納言有胤か女。成晴か終に
 のぞみて養子となり、その女を妻とす。

享保十五年五月七日遺跡を繼、元文二年十二月四日西城の御小性に列
 し、延享元年備中國松山城を板倉周防守勝澄にたまふにより、五月六日
 川勝左京廣當とともに彼地にいたり城引渡の役をつとむ。四年正月十
 一日御使番にうつり、このとし日向國延岡城を内藤備後守政樹にたま
 ふにより、六月十三日おほせをうけてかの地におもむき、十二月十九日
 布衣を著することをゆるさる。寛延三年正月二十八日西城の御目付に
 轉し、寶曆元年有徳院殿薨御により、七月十二日寄合に列す。二年御目付
 となり、五年四月朔日仰をかうぶり、美濃、伊勢、尾張等の川々普請のこと
 をつとめ、七年三月十九日より御船手をかぬ。九年正月十五日小普請奉
 行に轉じ、兼役もとのごとし。十二月七日從五位下大隅守に敘任す。十一
 年九月七日御作事奉行にうつり、兼役をゆるさる。十二月九日御勘定奉
 行にす、み、明和五年五月二十六日町奉行に轉ず。安永二年閏三月八日、
 去春より以來一人にてうちつゞき月番をつとめしを勞せられ、時服四

領を賜ふ。天明四年三月十二日大目付にす、み、四月七日さきに佐野善左衛門政言失心し、營中にをいて、田沼山城守意知に創つけしとき、成賢等、いまだ中間に在りしをもつて、その場に會せしよまうすといへども、延引に及びしゆへ、意知も多く創をうけて、つねに死にいたる。成賢等はことにその職にありながら、こゝろがけよろしからずとて、出仕をとどめられ、十七日ゆるさる。寛政三年五月十一日職を辭し、四年四月二十五日死す。年七十九。法名真空。妻は成晴か女。寛政重修諸家譜

天明元年辛丑○安永十年四月改元。○紀元二四四一年。德川治濟○一喬。○民部卿。ニ金二千兩ヲ與フ。後給賜若クハ貸假スル者數回也。○天明集成。

德川治濟賜金
德川治濟賜金
金事蹟

天明元丑年八月

天明集成ニ見ユ。

御勘定奉行に

此度御養君様御本丸に被爲入候節之御入用并茂姫方御引移其外御入用とも金貳千兩、從公儀相廻候様致度旨、民部卿殿家老申聞候間、右金貳千兩一ツ橋に可被相廻候。尤家老に可被談候。

天明二寅年十一月

御勘定奉行に

民部卿殿次男松平雅之助儀、松平筑前守○黒田治高。急養子相願候ニ付、爲支度金貳千兩、民部卿殿に被遣候間、得其意、家老相談可被渡候。十一月

天明三卯年十二月

御勘定奉行に

民部卿殿勝手向年々御不足相立、公儀は是迄御手當金並御取替米金後有之候得共、無御據入用相増、町人等に後入用金爲差出候處、利倍之跡引旁御繰廻し出來兼、御難澁ニ付、御合力増之儀被相願候。是迄度々御手當も被成進候事故、此上御合力増之儀容易難調、追ふ御沙汰も可有之候得共、當暮差當御不足金多相聞候ニ付、當春より之御取替金當暮御返納可有之分金壹萬三千兩、不殘被進候間、得其意、家老に可被談候。十二月

天明四辰年六月

御勘定奉行に

民部卿殿勝手向年々御不足相立、御差支ニ付、御合力金増被進候様被成度旨、

去年中被相願候處、去年者差懸り御難澁之趣ニ付、去暮御返納可有之分壹萬三千兩不殘被進ニ相成、此上御合力増之儀者容易難調、追而御沙汰後可有之段相達置候ニ付、猶又此節御沙汰有之候様致度旨被申聞候。是迄度々之御手當共被進事ニ候得者、如何様ニ後御繰合出來可致處、當時之御不足計ニ後不相聞、舊年御不足金御他借之跡引ニ相成、自然之御差支相増候趣ニ相聞、無御據儀ニ候間、當辰年より金壹萬兩宛御勝手向相直り候迄、年々御合力被進候間、其段可被申上候。右ニ付拾ヶ年之間被進候筈之三千兩者、當年分者被進來已年より被進間、鋪候間、此段後可被申上候。

右之通民部卿殿家老衆ニ相達候間、得其意、御繰合次第右金可被相渡候。

六月

天明五巳年四月

御勘定奉行

民部卿殿築地下屋敷、去暮類焼之場所御普請之儀、先達る被差出候疊代共御入用積有之候處、此度金五千兩御金ニ多被遣候間、一橋ニ入札之もの申付、猶又仕様等差略之上、普請出來候様可被致候。尤御勘定奉行可被談候。

四月

右之通民部卿殿家老ニ相達候間、可被得其意候。

天明四年甲辰

○紀元二四四三年

春、是ヨリ

先天明二年壬寅

○紀元二四四二年

三年癸卯

○紀元二四四三年諸國凶歉シ、米價次第ニ高ク、是ニ於テ

江戸亦飢饉ス。○變災篇參照

幕府乃チ令シテ米穀ノ圍置買占ヲ禁シ、一面之カ低賣ヲ爲シ、

又飢民ヲ救恤ス。

○安永撰要類集、森山孝盛日記、曳尾庵隨筆、天明紀聞、視聽草、續王代一覽。

天明四年度飢饉救恤

天明元年上半年マデ米穀下直ナリシモ、下半年ヨリ二

年ニ入リテ次第ニ騰貴シタルコト、米價記

五穀無盡藏、安永九庚子年米穀殊の外下直よして、白米一石の價五十二三匁、悪米をいとひされ、四十匁位よてもうまゝ也。天明元丑年の夏迄米直段下直うちつゝ、き云々此丑年秋作よろしからざる故、米直段六七十匁もあ

りて、追々少つゝ引あげしか、天明二寅年七月九日八月九日大風よて、秋作大

よすみ云々。

ト記スカ如シ。遂ニ二三年ノ凶歉ト爲リテ、

天明四年度飢饉救恤

天明四年度飢饉救恤事蹟

天明三年癸卯九月二十六日、代官ニ令シテ、饑歲ニ藁餅ヲ調製シ糧食ニ充テシム可キヲ、各地方ノ鄉村ニ教示セシム。諸例撰要卷六 徳川理財會要ノ諭示ヲ見、四年ノ飢饉ヲ致ス。三年四年ノ米價及一般經濟事情ハ、三貨圖彙ニ左ノ如ク記ス。

天明三癸卯年、正月ヨリ追々高直ニ相成。

肥後米 正月ハ、代七十九匁八分ヨリ八十二三匁。五月ハ、七十六匁六分。

八月ハ、九十二三匁。十二月ハ、九十八匁。

筑前米 正月ハ、代七十七匁九分ヨリ八十目四五分。五月ハ、七十六匁八分。

分。八月ハ、九十目餘。十二月ハ、九十二三匁。

昨寅年諸國不作ニテ米價高直ニ成、コレニ依テ春以來市民困窮ニ及ビ候ニ附、米穀始メ綿油等ニ至ル迄、過分ニ買置申間敷旨、度々制令コレアリ、且市中ノ者ヨリモ、米錢ヲ貧民ヘ施行ス。然レドモ米價益々貴ク、殊ニ當年ハ諸國共氣候不順ニシテ、五月頃冬ノ如ク寒冷行ハレ、麥不作ニテ別テ關東筋ハ、六月中旬迄、雨繁ク洪水等コレアリ、七月朔日ヨリ五日ニ到ル迄、信州淺間山燒出、近國ノ田畑夥ク損毛シ、其八九月ニ至リ寒冷強ク、關東北國筋ハ勿論諸國ト

モ五穀不熟ニテ、米價高直ニ成、江戸表ハ金一兩ニ米四斗六七升、新米五斗前後、冬ニ至リ愈米拂底ニテ、極月精麥一石ニ付銀ニテハ九十目餘。コレニ依テ市民米穀買シメ置候儀嚴シク制令アリ。大坂米商人ノ中ニ、二十八計リ御咎ヲ蒙ル者コレアリ。京都ハ六七月ノ頃、玄米一升代二百五十文、大豆一升代百五十文、麥、蕎麥ノ類、一升百五十文、九月頃白米一石百一匁。十月、新女院敬禮崩御、コレニ依テ御葬式濟迄鳴物停止仰付ラルヘキ處、當年ハ米穀高直ニテ、下民難澁ニ及フヘキ趣ヲ以テ、普請并渡世ノ鳴物等ハ御免コレ有リ、仁愍ノ政下民恐歡ス、今年瑕金、輕目金ヲ後藤庄三郎方ヘ差出シ、無代ニテ精金ト引替ベキ旨令セララル。尤近年瑕金、輕目金多ク相成リ、世上一統融通相滯ル故ヲ以テナリ。但シ後藤方ニテ精金ト瑕金無代ニテ引替候ニ付、兩替屋ノ者共ヘ役銀ト唱ヘ、兩替交易賣リ買ヒ、金一兩ニ六厘宛ノ入用ヲ掛ケ、日々賣買高ノ役銀掛リモノヲ金座ヘ差出シ申ベキトノ事。

一、文字金之儀、吹替以後四十年餘、吹方無之、追年瑕金、輕目金多ク相成候ニ付、世上差支にも及候而者、難捨置事に付て、已來兩替屋共より、金座ヘ差出し次第無代に直し相渡し、兩替屋共錢屋共より、金座方ヘ役銀爲差出候に付、是

迄兩替屋之歩合請取居候上、又増歩受取候之儀指免し、右兩替や錢屋共銘々商ひ高之内より金座へ役銀差出、早々増歩取遣り始候様、右兩替屋錢屋共へ申渡置候之間、兩替致候節は増歩差出し可申候。略

右新規ノコトニテ、金錢商賣ノモノハ勿論、諸侯方江戸仕送り金、市中日々ノ賣買ニ六厘ヅ、相場ノ外ニ増歩掛り、一統迷惑混雜大カマナラズ、依之市中内證賣買等多ク、自然ト相庭所賣買サビシク喧シ。此役銀モ廣大ノコトニテ、一統ノ迷惑トナルニヨリ、天明七未年相停メラル。尤同年七月、奥州白川公執政職仰蒙ラレシニヨリ、右役銀其外後藤米切手加印、鐵座、眞鍮座、春米屋、駄賣株薪炭屋株、繰綿延賣買株、上ミ積米問屋株、金錢小貸會所ヲ始メ、スベテ近年冥加銀運上銀等差出シ御免コレアリ、諸人迷惑トナル諸物株ノタダヒ皆悉クサシヤメラル、其仁慈善政萬民恐歡ス。

天明四甲辰年、正月月中旬

筑前米 代百五匁七分

肥後米 代百十五匁七分

同六月中旬

筑前米 代百一匁

肥後米 代百十一匁三分

金

代凡前ニ同シ

錢

右同斷

當年^{天明四年}ハ東西國々七八歩ノ作ニテ、十月新穀ニ相成リ、肥後米七十一匁前後、筑前米七十目前後、コノタビ諸家藏米切手改ノ儀、吳服所後藤縫殿之助へ仰付ラレ、米切手ニ加印イタサセ、印料トシテ十石ニ付銀一匁ヅ、買主ヨリサシ出シ申ベシトノコトニテ、京都、大坂、天津ノ米商買ノモノへ仰渡サル。然ル處諸家方ノ米切手ニ町人加印ノ儀ハ、一統不承知ニテ、江戸表へ御願ニ相ナリ、據ナク切手加印ノ儀ハ相止ミ、日々拂米高ヲ其藏元ヨリ公邊へ書札ヲ以テ相トドケ、コレニ後藤ヨリ加印イタス。又濱方ヨリモ買受高ヲ其時々相届ケ候。コレニ依テ右印料銀一匁ノ外ニ、一分三厘ヅ、濱方入用トシテ、是ヲ又買主ヨリ出銀イタシ候コト、諸家藏米數萬石ノ米切手ニ、十石一匁ヅ、ニテハ莫大ノ印料銀ナリ。コノ印料ヲ見込テ、米買主ヨリ二三匁モ下直ニ入札イタシ候故、詰リハ諸家方ノ迷惑ト成ル。加印ノ儀、天明七未年正月相停メラル。今年米穀拂底ニヨリ、高直ニテ市民難澁セリ、コレニ依テ^{當五月}御藏玄米一石ヲ七十目ニ定メラレ、市民へ賣渡サル、全ク窮民ヲ救ハル仁慈推テ知ルベシ、當四月下旬、白米一石百三十目餘也。

一、米穀買占圍置禁止 天明三年ヨリ屢令達有リ。

天明三卯年七月廿五日相觸申候

米高直ニ付御觸

去年ノ打續米高直ニ候處當年後猶以高直ニ付下々及困窮候由相聞候依之米問屋共者勿論其外米商賣人米圍置不申無差滯商賣可致候若利徳之爲諸人難儀をかへりミレメ賣又ニ直段高直ニ賣出候筋後有之候ハ、吟味之上急度可申付候。

一、諸色之直段高直ニ有野菜等後ニ増倍三増倍高直ニ罷成町中輕き者共ニ別及難儀候由相聞候間諸色前載物等元直段引下ケ小賣後右ニ准一直段引下ケ可申候此節諸色高直之風聞ニ乘シ無故高直ニ賣候者有之候ハ、吟味之上急度可申付候。

右之趣堅ク可相守候若不届之致方後有之候ハ、訴可出吟味之上可爲曲事候。 卯七月

天明三卯年九月三日相觸申候

米穀諸色高直ニ付猶又町觸

一、米直段今以高直ニ付町方下々及困窮候由且白米小賣直段之儀錢相場ニ隨ひ高下有之處近頃錢相場甚狂ひ候故白米小賣割合致兼引下ケ不申候由相聞候間町中錢屋共儀書上候錢相場之通無相違賣買可致候若此上書上相場ニ相背不埒之賣買致米諸色小賣直段引下ケ候障ニ相成候趣相聞候ハ、吟味之上急度可申付事。

一、米其外諸色高直成節買候故下直ニハ賣出不申候者後有之哉之由相聞候右先達亦も相觸置候間貯置不申賣出可申儀ニ候處右之通ニ有ニ圍米同様之儀ニ相聞候此上心得違不仕少分ニ有も圍置不申賣出可申事。

一、春米屋共儀元直段并錢相場割合等相知レ有之事ニ候得ニ右相場ニ引合無油斷小賣引下ケ可申事。

一、穀商其外諸色直段前載物等迄今以高直之由此上元相場小賣共ニ直段引下ケ商賣可致事。

右相觸候趣相背不埒之商賣人有之候ハ、可訴出候吟味之上急度答可申付候旨町中可觸知者。 卯九月○正賣
錄續同。

天明四辰年正月十六日相觸

米高直ニ付町觸

米直段去々年ハ打續高直之處當春ニ成猶又甚高直ニ相成町方及困窮此上下直ニ不相成候多ク取續兼候趣相聞候依之此節之儀ニ付米問屋共荷主ハ預リ置候商ハ米有之ヲ荷主共ニ懸ケ合貯不置仲買ニ不限米商賣人ハ勿論素人にも寂寄次第直ニ賣渡候様申付候且又實々武家方扶持米ハ格別偽申圍置候者有之町中ハ可訴出候吟味之上其米取上從公儀御拂可被仰付候

一、米下直ニ成候迄米問屋共仕入米之外上方筋地廻リ共入津之米穀ハ問屋仲買ニ不限素人ニハ賣買勝手次第可致候

一、米買ニ參候者直段相對致絲々間敷儀申間敷候若又理不盡成仕方後候ハ、米屋ハ可訴出候

右之趣町中可觸知者也 辰正月○正寶錄續同

天明四辰年閏正月十六日久世大和守殿○廣御渡

町奉行

當時米穀直段高直ニ付米穀所持致候者共貯置不申賣出し可申處去卯年中米穀賣買之儀ニ付村々騒立趣後有之品々風說等ニ恐々穀物所持之者後容

易ニ不賣捌貯置候様相成候多ハ彌直段後高直ニ相成一統可及難儀ニ付米麥ハ勿論諸雜穀共其制限村役人共小前百姓所持之分銘々家内人別ニ引合夏作出來迄之手當を殘シ置其餘之分ハ其持主限寂寄々々市場町場等ハ賣捌候様村毎申合小前迄迄心得違等無之様可致候若無謂風聞等ニ恐々米穀隱置候歟又ハ米穀賣候者ハ仇を致候者於有之ヲ可爲曲事者ハ

右之趣關東筋并陸奥出羽信濃國御料ハ御代官私領者領主地頭ハ村々ハ不洩様可被申渡候

辰閏正月○正寶錄續同

天明四辰年閏正月廿一日相觸申候

米穀高直ニ付村方被仰出候趣町觸

當時米穀直段高直ニ付米穀所持致候者共貯置不申賣出可申處去卯年中米穀賣買之儀ニ付村々騒立候趣後有之品々風說等ニ恐々穀物所持之者後容易ニ不賣捌貯置候様ニ相成候多ハ彌直段後高直ニ相成一統可及難儀ニ付米麥ハ勿論諸雜穀共其制限村役人共小前百姓所持之分銘々家内人別ニ引

合夏作出來迄之手當を殘し置其餘之分を其持主限り寂寄之市場町場等に賣捌候様村毎申合小前迄後心得違等無之様可致候若無謂風聞等二恐米穀隱置候歟又米穀賣捌候者に仇致候者於有之者可爲曲事者也
右之趣關東筋并陸奥出羽信濃國御料を御代官私領を領主地頭より村々に不洩様可被申渡候

右之趣關東筋并陸奥出羽信濃國領分知行有之面々に可被相觸候

辰閏正月天明集成同

天明四辰年四月廿六日相觸

米穀高直ニ付不相當之石數買持致間敷其外之儀ニ付町觸

諸國共近來米穀高直ニ有之候上別の去年以來直段引上ケ輕キ者共及難儀候趣相聞候ニ付米商賣之者勿論其筋渡世ニ不致者ニ有後不相當之石數買持候儀致間鋪其外町々在々之者共銘々當年新穀出來迄可取續手當之外餘慶之米穀不圍置其土地を不及申他國に後賣出候様致し并諸國之廻米道賣道買等決る致間敷候若他之難儀を後不顧餘慶之米穀圍置候歟又道賣道買等致候者有之におつてハ吟味之上御仕置可申付候且又願之儀等其筋

に不申立此度之申渡ニ乘じ大勢徒黨を集在町之人家打壞其外理不盡成儀等致におつては是又吟味之上御仕置可申付候間所役八五人組之者共申合心を附右躰之者於有之を早速其筋に可申出若等閑成儀有之を一同可爲曲事候○正寶錄續ニハ本達ノ末ニ四月ト記シ右ハ四月廿六日喜多村寫物町中連判同晦日同所納ト附記ス

右之通諸國御料を其所之奉行御代官御預り所私領を領主地頭を町々在々浦々迄不洩様急度可被申渡候

右之趣可被相觸候 四月天明集成同

天明四辰年四月十四日水野出羽守殿○忠御直御渡山村信濃守○其にも寫遣

町奉行に

近來米穀高直ニ有之候上別の去年以來直段引上ケ輕キ者共及難儀候趣相聞候然處大坂表町人共買持米致間鋪旨彼地町奉行を再應相觸置候處多分之米買持候者有之趣相聞右町奉行に吟味之上買持米合拾九万六千四百四拾石有之候ニ付一件御咎等之儀御城代を伺之上夫々御咎申付右買持米之内三分一之分六万五千四百八拾石取上可申付處此度之儀ハ格別之用拾を以壹石ニ付銀七拾目之積代銀被下殘米拾三万九百石餘を勝手次第致賣

買、尤此後他國の相廻り候米穀共、不圍置賣買爲致、前書六万五千四百八拾石之内、四百八拾石を大坂御藏に入置、三万石は江戸表、壹万石を京都に相廻、貳万五千石は大坂表之積、右代銀に運賃諸懸り等差加、石高二割合、壹石に付代金何程と定、江戸・京・大坂共爲御救、町之輕キ者共、爲買請候積に付、右之趣、江戸町々に申渡、廻米着船次第御救之御趣意末々迄行届候様取計、町々に爲買請可被申候。右代金取立納方其外委細之儀は、御勘定奉行可被談候。

四月

安永撰要類集

二、米穀廉賣 左ノ如シ。

天明四辰年四月廿九日田沼主殿頭殿〇意に御扣御直ニ上ル。同晦日酒井石見守殿〇忠に後御扣大前孫兵衛〇房を以上ル。

御救買請米渡方之儀に付奉伺候書付

曲淵甲斐守

近來米穀高直ニ有之候上、去年以來別る直段引上、輕キ者共難儀仕候に付、江戸・京・大坂共ニ爲御救買請米被仰出候趣、町々に可申渡旨被仰渡候に付、申上候趣、左之通御座候。

一、町々に申渡候日限之儀、江戸・京・大坂同日ニ仕度奉存候間、其後御勘定奉行申談來月朔日申渡候様可仕候。

一、大坂の之運賃并諸懸り共、米壹石に付銀五匁程迄相懸り可申趣ニ御座候處、尙又此節取調、五匁迄者相懸り申間敷趣御座候。併計立相渡候節之欠米、且買請候者万一病死又欠落等致、家主共ニ代金爲償候と、家主共難儀仕如何ニ御座候間、代金償方并渡方之節、人足入用迄相懸候故、旁諸懸り共壹石に付銀七拾五匁宛之積を以相渡、尤殘銀有之候は、其節相伺候様可仕候。

一、米積入候場所之儀、一旦御藏に入相渡候方可然奉存候旨、先達る御勘定奉行に申談候處、御藏に輕キ者共日々夥敷入込候と甚混雜仕渡方迄手間取可申奉存候間、寂寄を分町藏四ヶ所程に積入、其場所寂寄之町々を寄セ相渡候は、混雜も不仕、其上居町に之持運迄仕能別る難有可奉存候間、左之四ヶ所ニ相渡候様可仕候哉。

日本橋土手藏

深川佐賀町邊ニ壹ヶ所

芝田町邊ニ壹ヶ所

淺草邊ニ壹ヶ所

右四ヶ所ニ與力同心共四五人宛も附置、町年寄共ニ爲取計、米爲相渡候様

可仕候哉。

一、米買請させ候者共之儀也、凡店借之者共相渡、店借之内ニ有徳之者
 勿論外町ニ有所持屋敷等御座候者等也、相除候様申渡、其町之名主家主共
 取調申出候上、石敷割渡させ候様可仕候哉。
 一、右割渡并代金取集納方等ニ名主家主共殊之外骨折可申奉存候間、名主
 家主共ニ後人別相應ニ買請させ候様可仕候哉。
 右取調候趣書面之通御座候伺之通被仰渡候ハ、猶又御勘定奉行申談候様
 可仕候。以上。

辰四月

曲淵甲斐守○景

御附札

此通り可被致候。

同

書面壹石當り之直段ニ有ハ、代銀不足之趣ニ候間、猶又直段之儀ハ御
 勘定奉行に可被談候。

御附札

着船之節俵入改方等之儀ハ、御勘定奉行に被相談、右場所組之者共
 差出、御藏定法之通相改、其外ハ伺之通可被取計候。

同

此通り可被致候。

同

此通り可被致候。

天明四辰年五月朔日山村信濃守○良立會申渡、町年寄三人并御番所ニ取扱
 懸り申付候ニ付、年番吉田忠藏出席。

名主共申渡

壹番組

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 本町壹丁目外八ヶ所
名主 傳左衛門 | 本町三丁目外貳町
名主 文左衛門 |
| 大傳馬町壹丁目外六町
名主 勘解由 | 鎌倉町外九ヶ所
名主 平次郎 |
| 新草屋町外六ヶ所
名主 定次郎 | 本銀町壹丁目外四ヶ所
名主 惣次郎 |
| 鐵炮町
名主 惣八郎 | 本兩替町外壹町
名主 八郎右衛門 |
| 室町壹丁目外七ヶ所
名主 助右衛門 | 本船町外五ヶ町
名主 太郎兵衛 |
| 品川町外壹ヶ所
名主 六右衛門 | 安針町
名主 吉右衛門 |
| 箱崎町壹丁目外三町
名主 又右衛門 | 小網町壹丁目外四ヶ所
名主 伊兵衛 |
| 新材木町外五町
名主 吉左衛門 | |

貳番組

葺屋町外壹ヶ所 名主 庄左衛門
 界町外五ヶ所 名主 松五郎
 田所町外三町 名主 平藏
 神田紺屋町三町目外三ヶ所 名主 市之丞
 馬喰町壹丁目外八町 名主 源兵衛
 横山町三丁目外八ヶ所 名主 喜左衛門
 村松町外四ヶ所 名主 源六
 三俣富永町月行事 三郎右衛門

三番組

淺草平右衛門町外七ヶ所 名主 平右衛門
 同所茅町壹丁目外三ヶ所 名主 彌兵衛

四番組

西河岸町 名主 清右衛門
 吳服町外六ヶ所 名主 藤次郎

五番組

南傳馬町貳丁目外四ヶ所 名主 新右衛門
 同所三丁目 名主 善右衛門

六番組

彌左衛門町外七ヶ所 名主 伊左衛門
 木挽町壹町目外九ヶ所 名主 七太郎

七番組

本八町堀壹町目外八ヶ所 名主 十左衛門
 南新堀壹町目外貳ヶ所 名主 平兵衛

八番組

櫻田久保町外壹町 名主 惣吉
 同所伏見町外壹町 名主 平八

九番組

芝金杉通壹町目外三拾三ヶ町 名主 勘左衛門
 本芝壹町目外六ヶ所 名主 八郎右衛門

拾番組

麻布市兵衛町外貳ヶ所 名主 市兵衛
 同所谷町外三ヶ所 名主 太左衛門

拾壹番組

神田多町壹町目外三町 名主 權左衛門
 同所貳町目外貳町 名主 十兵衛

拾貳番組

神田佐久間町三丁目外七ヶ所 名主 源太郎
 同所壹町目外八ヶ所 名主 仁左衛門

拾參番組

神田明神下御臺所町外六ヶ所
名主 太郎右衛門

湯嶋天神門前町外四ヶ所
名主 八郎右衛門
煩ニ付代 乙三郎
六人略

拾四番組

小石川春日町
名主 長三郎

同所上富坂町外五ヶ所
名主 源三郎
煩ニ付代 清藏
二人略

拾五番組

麴町壹町目外拾九ヶ所
名主 與兵衛後見 五郎兵衛
右 與兵衛

同所谷町
名主 清兵衛
六人略

拾六番組

本所尾上町外拾ヶ所
名主 長兵衛

同所林町壹丁目外九ヶ所
名主 幸右衛門
八人略

拾七番組

深川海邊大工町外拾三ヶ所
名主 八左衛門
煩ニ付代 安太郎

同所佐賀町
名主 藤右衛門
八人略

拾八番組

南本所元町外拾三ヶ所
名主 六郎右衛門

北本所表町外四ヶ所
名主 五郎左衛門
四人略

拾九番組

麻布善福寺門前外三ヶ所
名主 傳藏

同所不動院門前
名主 武左衛門
四人略

貳拾番組

牛込無量寺門前外拾壹ヶ所
名主 長次郎後見 文次郎

牛込築地片町外九ヶ所
名主 安兵衛
六人略

貳拾壹番組

淺草龍寶寺門前
名主 八右衛門

同所普願寺門前
名主 半三郎
三人略

近來米穀高直ニ有之上、別る去年以來直段引上ケ、輕キ毛の共及難儀候ニ付、於大坂米壹石ニ付銀七拾目ニ御買上有之、江戸に三万石京都に壹万石大坂に貳万五千石、町々輕キ毛の共爲御救買請被仰出候、江戸表之儀は、大坂より之運賃諸懸り等有之ニ付、壹石ニ付銀七拾九匁七分直段ニ有、米着船次第可相渡候間、難有奉存、御救之御趣意末々迄行届候様、支配限不洩様可申聞候。尤店借之内ニ有、有德之毛のハ勿論、所持屋敷等有之毛のハ相除、輕キ者共計に買請させ候積、其方共并家主共取調、早々可申出、右代銀納方等委細之儀を、奈良屋市右衛門より可申聞候。

一、右ニ付其方共并家主共骨折可申候間、家内人別ニ應、其方共家主共は、右之内買請させ可申候ニ付、難有奉存、家主共にも其段可申聞置候。五月天明四辰年五月三日水野出羽守殿友○忠に御直ニ上ル。尤山村信濃守○良一同

罷出上ル。酒井石見守殿休○忠は大前孫兵衛明○房を以上ル。田沼主殿頭殿次○意
は自分壹人ニ上ル。但御届之下に朱ニ御扣を認メ上ル。退出出羽守
殿に信濃守同道ニ罷越五十川左但馬逢無急度御禮申上、主殿頭殿は自
分壹人罷越、高木俊藏に逢御禮申上ル。

御救買請米之儀申渡候ニ付申上候書付

御届

曲淵甲斐守
山村信濃守

近來米穀高直ニ有之候上、去年以來別直段引上、輕キ者共難儀仕候ニ付、爲
御救買請米被仰出候段、一昨朔日町々名主共并名主無之町々月行事共呼
出御救之御趣意未々迄行届候様、支配限不洩様可申聞旨申渡候處、難有奉存
候旨申之候。依之申上候。以上。

辰五月三日

曲淵甲斐守 山村信濃守

天明四辰年五月九日松本伊豆守持○秀に達、翌十日下ヶ札致來吉田忠藏奈良
屋市右衛門に見セ置。

松本伊豆守殿
赤井越前守殿

曲淵甲斐守

此度大坂表相廻り候御救買請米三万石、水揚之上改濟、管屋久兵衛差出

候請取書通帳面組與力共見届致印形候様、此間之御書面ニ有之候、右米請
取方共外共ニ諸事町年寄共ニ爲取計組與力を立合ニ差出候積リニ有之候
間、一日限印形并皆濟ニ至候本紙共、町年寄共印形ニ爲請取申度候。依之及
御懸合候。

辰五月

下ヶ札

御書面町々買請米納相濟候節、管屋久兵衛差出候請取書に、町年寄印形
致候積リ爲御取計可被成旨御懸合之趣致承知候。町年寄印形ニ爲請取候
ゑ後差支候筋無御座候間、其段久兵衛に後申渡候。

辰五月

松本伊豆守持○秀 赤井越前守忠○忠

天明四辰年五月十日松本伊豆守請取印鑑を奈良屋市右衛門に即日渡ス。

曲淵甲斐守殿

松本伊豆守
赤井越前守

此度從大坂表相廻り候米三万石之儀、品川着船之上取計之儀ニ付、管屋久兵
衛手代共御役所に伺ニ罷出候儀も可有之旨申聞候間、罷出候ハ、懸り御組
之者差圖有之候之様致度候。且亦大坂表ニ御用米船積之節、青木楠五郎、

霸都時代ノ救濟

万年七郎右衛門手代立合、俵入貫目様シ石等相改致封印候ニ付、右廻米致着船候ハ、送狀并貫目改候様石封印改之上、廻米御請取有之候様存候。依之右兩人手代共印鑑一枚差進申候。以上。辰五月
天明四辰年五月十二日松本伊豆守に達ス

松本伊豆守殿
赤井越前守殿

曲淵甲斐守

此度大坂表ハ相廻り候御救米之儀ニ付、一昨日被仰聞候通、宮屋久兵衛手代トモ拙者御役所に罷出申候。以來組之者立合候儀有之候得者、其時々御達不申呼出并町年寄共宅ニカも對談爲致候。依之御達申置候。辰五月十二日
天明四辰年六月十日田沼主殿頭殿に御直ニ上之。水野出羽守殿
酒井石見守殿に後御銘々御直ニ上之。

御救買請米着船仕候儀申上候書付

御届

曲淵甲斐守

先達御當地町人共ハ買請之儀被仰出候大坂表ハ相廻候米、此節五艘着船仕候間、昨九日ハ水揚仕候藏詰相濟次第割渡候様可仕候。依之申上候。以上。
辰六月十日
曲淵甲斐守景漸

天明四辰年八月三日田沼主殿頭殿に御内意申上、入御覽可然旨被仰聞候間、直ニ上之。水野出羽守殿酒井石見守殿に御直ニ上候。同七日大前孫兵衛を以御下ケ、承付上候様被仰聞、同十日同人を以承付返上。

御救買請米殘米之儀ニ付申上候書付

書面之通、殘石澤手米共御藏納ニ仕候様、御勘定奉行可申談旨被仰渡、奉長候。

辰八月七日

曲淵甲斐守○景漸

今般町々輕キ者共ハ御救ニ買請被仰付候大坂表ハ之廻米、追々着船仕、高三萬石之内着船之分貳萬八千六拾八石餘、不殘去月廿七日迄ニ町々ハ相渡、一同難有奉存候。然處段々米直段引下ケ、町賣白米鳥目百文ニ付壹升貳三合ニ罷成買受米壹石ニ付七拾九匁餘之直段ニカ、町賣米ハ高直ニ相當候間、延着之跡船貳艘分并澤手米共ニ御藏納ニカ相成申問敷哉之段、御勘定奉行ハ先懸合置申候。畢竟格別之思召を以、御救買請米被仰付、一統冥加至極御慈悲行届、此上後無御座難有奉存シ罷有候處、此節尙又米直段日々引下ケ、延着殘米之分着船之上相渡候カ、町直段ハ格別高直ニ相當、殊更少分之殘石ニカ御座候間、何卒可罷成儀ニ候ハ、前書殘石澤手米之分共、御藏納被仰付被下

置候様仕度奉存候。依之申上候。以上。

辰八月

曲淵甲斐守○景

天明四辰年八月

曲淵甲斐守殿

松本伊豆守
赤井豊前守

先達御談有之候。江戸町々御買セ米三萬石之内、是迄着船之分貳萬八千六拾石餘之外、延着跡船貳艘分此内壹艘難船之澤手撰出米共、筈屋久兵衛ハ淺草御藏納之積り伺相濟候間、其段申渡候。依之御達申候。八月

天明四辰年八月十六日水野出羽守殿
酒井石見守殿に春琢を以、信濃守ハ上ル。御僉儀寄合ニ

付、登城不致候ニ付、如右。

御救買請米代金之内御藏納之儀申上候書付

曲淵甲斐守 山村信濃守

大坂表ハ相廻、御當地町々輕キ者共、御救買請米被仰付、割渡候米代金之内、此度御金藏に相納可申分左之通御座候。

一金壹万五千兩

右之通追々御金藏に相納可申候。依之申上候。以上。

辰八月

奈良屋市右衛門 喜多村彦右衛門

樽屋與左衛門

前書之通町年寄共書付差出申候。書面之通御藏に相納候段、御勘定奉行申談候。依之申上候。以上。

辰八月

曲淵甲斐守○景 山村信濃守○景

天明四辰年九月三日

上方米引受候積約束致候ハのハ可申出儀ニ付町觸

(卷)辰九月三日相觸申候。

上方米引受候米問屋之外、町々米買賣人共又ハ素人共ハ、當時上方米引受候積り荷主共、約束致置候者有之候ハ、何國何方誰ト申者ハ米何程引請候約束致置候ト申儀書付認當人并五人組名主加印致、來ル七日迄奈良屋市右衛門方ハ可差出候。右約束無之分ハ、名主支配限其斷書可差出候。名主無之町々七月行事五人組ハ其斷書可差出候。

右之通從町御奉行所被仰渡候間、町中不殘早々可被相觸候。以上。○正寶
錄續同。

九月

霜都時代ノ救濟

天明四辰年九月七日赤井豐前守の請取、去月中請取候様ニ心得吳候様被申
開候間、十九日下札致返却。

町奉行衆

赤井豐前守〇忠暁

伊奈半左衛門御代官所
武州豐嶋郡谷中善光寺上地
半兵衛
淺草猿屋町
茂兵衛
同所福井町
茂兵衛
仁右衛門

右之者共儀拙者方に願出候也、大坂正米切手之儀、便利成品ニ付、江戸表は
大坂表に申遣切手買請候者、有之候處、遠國相隔候儀ニ付、交通而已ニ
難行届、又之不案内等ニ紛敷切手買請候候間々、有之其者之損失を無是非
儀ニ候得共、若損失を厭ひ右之切手賣渡段々ニ買請候之様成行可申哉、左候
る後内々賣買之儀ニ付、改メ候者、後無之、自ラ紛敷切手流布致候様相成可申
左候る前々之御觸に後相振、恐入候儀ニ有之、其上右賣買ニ付、江戸表は
壹人立飛脚差立候るを失脚、後相懸り、遠國之儀故、米相場之高下、後早速ニ難
相分候ニ付、米商致候者共相歎罷有候間、可相成儀ニ候ハ、江戸表ニ正米切
手取次所壹ヶ所相建、大坂表に手代共差遣置、問屋中買等に相對致、大坂表仕

來之通取計、藏屋敷に買請置候切手外に賣渡候を相對之上買請、望之者に差
遣、米百石ニ付敷金五兩宛取次所に請取、米渡方并外望之ものに賣渡候儀共、
大坂表仕來之通取計、賣買方片付候上ニ、百石ニ付口銀拾五匁ツ、取次所
に請取、諸事取次所に引請賣買世話致候ハ、江戸表賣買方取メ、後相成
米商致候者共勝手ニ後相成候間、江戸表之分右願人一手ニ引請申付候ハ、
紛敷切手決り無之様取メ致、壹ヶ年冥加金五百兩ツ、相納可申、尤冥加金之
儀、猶又吟味ヲ請相増候様ニ後可致、其外御入用米御座候節申付候ハ、相
働時相場は直段引下、何分御益有之候様賣上可申旨申立候、右之通相成候
も、江戸表町々差障之筋を無之候哉、御下ヶ札被仰聞候様致度、此段及御懸合
候以上。辰八月

下ヶ札

書面御當地の、下リ米引請候儀、下リ米問屋之外、不相成定ニ御座候。大坂表正米切手取次
所相建、大坂表正米買請候切手を以米藏出致、御當地願人共方に積取候儀を不相成事故先
ツ相糺不申候。夫共引請方ニ品、後有之候哉、其段難相分候。尙又御調被成可被仰聞候、且右同
様之願度々御當地町人共願出候得共、前書之通定有之候儀故、其度々願取上、不申、訴狀差返
候儀ニ御座候、

辰九月

曲淵甲斐守

幕府時代ノ救濟

一〇三三

天明四辰年九月十日

米下直ニ相成候ニ付、前々之定ニ立戻問屋之外脇々ニ多上方米引受申間敷儀町觸

(奉) 辰九月十日相觸申候。

米直段格別高直ニ相成町方及困窮候ニ付、當正月相觸下直ニ成候迄米問屋共仕入米之外、上方筋地廻り共入津之米穀々問屋仲買ニ不限素人ニ多後賣買勝手次第爲致、暫問屋之定相崩手廣賣買申付候。然處此節米相場下直ニ成候ニ付、上方筋地廻り共ニ當正月町觸以前之姿ニ立戻前々之通上方米之儀々米問屋兵庫屋彌兵衛、兵庫屋武兵衛、西宮甚左衛門、川村八兵衛、白子屋清右衛門、高間傳兵衛右六人之外、脇々ニ多引請取捌申間敷候。勿論商米を武家之用米ニ取捨、買賣人素人共ニ賣散候儀致間敷候。右ニ付當時脇々ニ上方米所持之分有之候ハ、早々今日ヨ日數廿日限ニ取捌候ハ、急度可申付候。此旨町中可觸知之也。○正寶 辰九月十日 錄續同。

天明四辰年九月廿日田沼主殿頭殿口上ニ多申上候處、可然旨被仰聞候ニ付、水野出羽守殿酒井石見守殿御直ニ上ル。同廿九日大前孫兵衛を以御下

ケ、承付上候様被仰聞翌晦日承付、同人を以返上、主殿頭殿ハ御直ニ上、御禮をも申上候。尤朱書ニ多出羽守殿差上候書付寫認、肩ニ張上ル。

御救買請米代殘金之儀ニ付奉、伺候書付

書面伺之通、餘金米渡方諸入用ニ相渡相殘候分骨折候者共ニ被下置候旨被仰渡奉畏候。

辰九月廿九日

曲淵甲斐守

先達御當地輕キ町人共ニ御救之爲、買請米被仰出、大坂表ハ相廻り候米三万石之内、延着之分先達申上候通御藏納ニ仕、町方ニ相渡候分貳万八千六百拾八石餘、運賃共壹石ニ付銀七拾九匁三分九厘四毛餘之積を以、此代金三万七千四百拾兩貳分銀六匁四分三厘六毛、此節迄追々御藏納仕候。然處欠米并買請候者病死欠落等償方并渡方之節入用後相懸候ニ付、壹石ニ付三分餘相増、七拾九匁七分宛之積を以買請申付候間、右餘慶之代金百四拾三兩八匁九分餘并出米代金貳兩壹分銀貳分九厘、都合金百四拾五兩壹分銀九匁貳分餘有之、右之内ニ多四ヶ所土藏番人賃錢并御藏納金銀包方其外人足諸入用ニ相渡、相殘候分金百四兩壹分有之候間、是又御藏納可仕儀ニ御座候處、右米請取渡之節懸り與力同心町年寄并其外之者共、日々早朝夕夜中迄相懸り、暑中

殊之外骨折候儀ニ御座候間、可相成儀ニ御座候ハ、右之者共ニ被下置候様仕度奉存候。依之奉伺候。以上。

辰九月

曲淵甲斐守○景

天明四辰年十月朔日田沼主殿頭殿水野出羽守殿酒井石見守殿ニ別紙添大前孫兵衛○房を以上ル。

御救買請米代餘金割渡候儀申上候書付

御届

曲淵甲斐守

先達多輕キ町人共ニ御救買受米被仰付候代金餘金之分、米渡方之諸入用ニ相拂、殘金共節骨折候者共ニ被下置候ニ付、別紙之通割合差遣候様可仕候、依之申上置候。以上。

辰十月

曲淵甲斐守○景

天明四辰年十月朔日大前孫兵衛を以上ル。

覺

一金拾五兩一分

町藏四ヶ處晝夜番人賃錢

一金九兩銀四匁五分

役人居小屋番小屋疊藁米改受取并割渡候

一金六兩銀五匁一分

節之損料もの諸色代金船賃共

一金四兩二分銀十一匁五分

米代金二朱判包候紙代箱代共

一金五兩三分銀十三匁六分

右包之節并御藏納持運人足賃

ノ金四十一兩銀九匁七分

提灯并蠟燭筆墨紙其外品々代金

一金五兩

掛り與力一人に

一金七兩三分

掛り同心共ニ

一金五兩

掛り町年寄一人に

一金貳兩二分

町年寄二人に

一金七兩

掛り町年寄手代共ニ

一金十三兩

米問屋六人に

一金七兩三分

同手代共ニ

一金五拾兩

米仲買四十人に

一金三兩二分

町藏四ヶ處之内土手藏相除外三ヶ處藏主七人

一、金貳兩三分

ノ金百四兩一分

都合金百四十五兩一分銀九匁二分

内、五分不足ニ付拂代金之内ニテ爲引候積

右之通御座候。以上。辰九月

天明四辰十月五日水野出羽守殿 酒井石見守殿に隆琢を以上之、御勘定奉行衆に松本伊豆

守持○秀に達ス。

御救買請米代殘金御藏納之儀申上候書付

曲淵甲斐守 山村信濃守

御救買請米町八共の割渡候石高貳万八千六拾八石七升壹合壹匁代金町々々相納候分

金三萬七千貳百八拾三兩三分銀三分七厘壹毛

但、先達る被仰渡候直段と大坂表の江戸着迄之運賃諸懸り共、壹石ニ付銀七拾九匁三分九厘四毛餘之積リニ御座候處、病死欠落者有之候節之償之積リニ爲、壹石ニ付三分六毛程餘慶取立申候ニ付書面之通金高ニ相成申

候。

出米壹石六斗九升七合五匁

代金貳兩壹分銀貳分九厘

都合三萬七千貳百八拾六兩銀六分六厘壹毛

内

金四拾壹兩銀九匁貳分餘

金百四兩壹分

米割渡候節之諸
入用ニ相拂申候。
米割渡候節骨折候
者共に被下置候。

御藏納高

金三萬七千百四拾兩貳分銀六匁四分三厘六毛

但、壹石ニ付銀七拾九匁三分九厘四毛餘

内

金壹萬五千兩

辰八月十日元方
御金藏に上納。

金壹萬五千兩

同月十八日同斷。

殘

金七千百四拾兩貳分銀六匁四分三厘六毛

此度上納可仕分

幕府時代ノ救濟

右之通殘金近々御金藏に皆納可仕候。依之申上候。以上。

辰十月

奈良屋市右衛門 喜多村彦右衛門

樽屋與左衛門

前書之通町年寄共書付差出申候。書面之通御藏に相納候段、御勘定奉行申談候。依之申上候。以上。

辰十月

曲淵甲斐守 山村信濃守

安永撰要類集

一、昨年^{天明三年}餓死人多、關東筋在方江戸町中及困窮、哀成事共巷説區々也。京、大坂ニあるも町人共與力なと分限ニ應し、施行米杯致候由、此節京都に於て壹萬俵、大坂貳萬俵、江戸三萬俵、御救のため御拂米被仰付。

森山孝盛日記

春の頃^{天明四年}所々に無宿菰かぶり多く、江戸橋邊には貳百人餘も集り居候由。此節ますく關東き、ん、白米小賣百文に五合、まふすま百文に四升、糠百文ニ六升也。○六月に至り、御救として下直に三ヶ津へ被下、百文壹升、にして、江戸中の町役人、町中の者へ割渡す。深川一色町小松町に御役人

中相詰、江戸中町人の御渡被成候ニ付、町役人共船に印を立、請取に出る。大群集也。

曳尾庵隨筆

三、飢民救恤 左ノ如シ。

一、此節^{天明四年正月}飢民毎々多く相成候。付、小網町廻船問屋共申合せ、小屋取立施行相始め、毎日朝六ツ時より四ツ時まで之由、時刻に後れ候者には、鳥目十六文つゝくれ遣し候。

一、二月^{天明四年}米小うり百文に五合、兩に四斗二升位也。近頃饑饉流民多ニ付、公儀にて無宿小屋六万坪へ取立ニ相成、無宿之者を皆々其處へ被遣、一人ニ付日々三合つゝの積り、被下置候。又江戸中輕き者共御救願、町奉行所へ申出候へ共、御取上無之趣、然るに諸民之難澁するを憚かられ候故ニや、曲淵殿は朝夕二食、儉約被致候由なり。其後三月、相成候てより、諸方人減し、被行是迄の奉公人、いづれも暇相出し候ニ付、俄ニ無宿之者多く相成り、段々ト六万坪へ被遣候へ共、後より追々と殖參り、小屋も充滿する程之由、是全ク米非常ノ高直故なり。

天明紀聞

天明四甲辰年又麥作惡敷、五月末より六月ニ至り、江戸町中ニある春米相場小

霸都時代ノ救濟

賣百文よ六合五夕或ハ七合餘位ニ賣買致し町々一統ニ困窮いせし候ニ付七月十二日關東御代官伊奈半左衛門○忠殿ハ江戸町中端々迄人別帳ヲ以御救米被下置候尤右之米御渡シ之場所ハ江戸橋日本橋之間土手藏前之河岸ニ下され候間町役人之者共罷越候亂ニ無之様ニ可請取旨を仰渡され則江戸町中端々此者迄車の上ヨ町名印候幟を建一町毎ヨ町役人之も并月行事罷出御米頂戴致罷歸人別帳通り割渡候一統頂戴いよ候。

七月○天明四年關東筋大水ニ有諸作甚不作ニ有近在の困窮ニよつて御代官伊奈半左衛門殿より兩國橋廣小路へ施行の御小屋掛り近在の百姓男女へ御救ひの施行煮出シ下さま候尤日數十四五日の間近在の百姓共老若の人數夥しき事ニ有之候飯をたき候場所ハ塚町菅屋町の芝居へ被仰付候公儀役人衆附之店此所ニ有たき出し兩國橋廣小路ハ小屋ニ有被下置候右躰之事ニ候間此々の暮ヨ御藏米御張紙三斗五升入百俵ニ付金百七拾五兩の御張紙右之通故町方春米玄米とも直段高直ニ有一統難儀ニ及ひ候○中尤江戸町中ニ有も豆腐やのきらば茂升ニ有とか登升四十八文位ニ賣申候如此ヨ町中困窮故騒動致候ニ付五月廿七日御救米として大人小兒の差

別ふく人別帳を以壹人ニ付白米三合貳夕ニ銀三匁二分ツ被下置候其後御救米として御代官伊奈半左衛門殿ハ人別帳を以壹人ニ付白米壹升ツ御渡一尤代銀壹人分銀九分五厘ツ上納可仕旨被仰渡同六月廿一日御同人ハ人別帳通壹人五日分の食物之由ニ有玄米五合此代六十穀麥四升此代二代錢上納御取立之場所玄米百文ニ付七合五夕穀麥百文ニ付二升之相場之由被仰渡候此砌錢相場金壹兩ニ付五貫八百文同六月廿八日御同人ハ玄米壹升穀麥二升小麥五合右壹人ニ有日積り五日之食物之由被仰渡此代上納御取立ニ有壹人前二百五十八文ツ御取立同七月六日御同人より玄米壹升穀麥二升小麥五合右壹人分ニ有日積五日分之よ此代上納御取立壹人前三色ニ有百九十五文ツ上納被仰付候夫ハ諸色少々宛直段引下ケ候町方米小賣相場錢百文ニ付上白米六合中白米六合五勺下白米七合是ニ准し諸色直段引下ケ騒動之後御藏前御張紙も三斗五升入百俵ニ付百三拾兩と改り申候此砌町奉行曲淵甲斐守殿山村信濃守殿勤役ニ有之候○下

視聽草

五月○天明四年ヨリ當月○天明四年六月ニ至テ諸國一同米價甚高シ京都大坂江戸米一

霸都時代ノ救濟

石價凡錢百三四十目ナリ。諸民大ニ困窮ス。京大坂江戸ニ於テ官米ヲ出シテ貧民ニ賜ル。續王代一覽

附記 時疫藥法 頒布

享保十八年十二月、飢饉後時疫流行ニ際シ、町奉行所藥法ヲ印行シテ、幕領町村ニ頒布シタルコト有リ。天明四年再其寫ヲ頒布ス。

○享保十八年十二月頒布藥法略。

右者、當時諸國村々疫病流行致シ、又々輕キもの共雜食に當リ相煩、難儀候趣相聞候處、前書享保十八丑年村々被下置候御藥法書付之儀、年久敷事故村々ニ致遺失候儀も可有之候ニ付、此度爲救右寫村々領主地頭より相觸候様可被致候。五月
右之通町中早々可觸知者也。
右御觸之趣難有奉承知、町中家持借屋店借裏々迄召仕等者不及申、別々末々輕キ者共迄御救之段、不洩様入念委敷爲申聞候様可仕候。爲後日町中連判之手形差上申候。仍如件。天明四辰年五月
公觸要拔書

物價制限

物價制限

天明四年十二月廿六日、江戸大火ス。顛末變災篇ニ具記ス。五年正月八日物價制限ノ令有リ。

天明五巳年正月八日

町觸書

出火ニ付、惣々職人手間賃并諸色高直仕間鋪旨前々度々相觸置候處、去暮出火以來、板材木竹木繩、越其外諸色、且職人手間賃都々普請方ニ相抱り候品ハ勿論、米穀小賣之白米并野菜物豆腐之類、草履草鞋等之輕キ品ニ至迄、俄ニ直段引上、過分ニ高直ニ候旨相聞候。此節商賣之品ハ、出火以前ニ仕込置候品ニ付、俄ニ高直ニ可相成様無之處、甚以不埒之至候。今日々諸色直段早々引下ケ商賣可致候。勿論諸職人手間賃是又猥ニ高直ニ致間敷、右之趣等閑ニ相心得、直段其儘すへ置、世上之差支諸人之難儀をも不顧、自己之利徳を爲可取格外ニ高直ニ商賣致候もの有之ニおゐてハ、人を相廻し或ハ密ニ買上させ、相糺候上召捕吟味之上、嚴敷咎可申付條、此旨町中可觸知候。

正月

霸都時代ノ救濟

安永撰要類集〇正寶

錄續同
一〇四五

東京市史稿救濟篇第一終

大正十年四月十五日印刷
大正十年四月十八日發行



編纂兼
發行者
東京市役所

印刷者
印刷局





